

写真32 拝殿建設に伴う出土遺物（7）（備前系陶器）

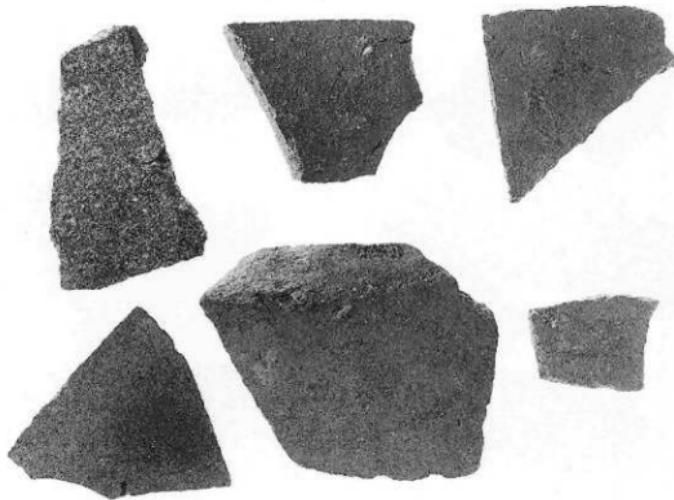


写真33 拝殿建設に伴う出土遺物（8）（肥前系陶器）

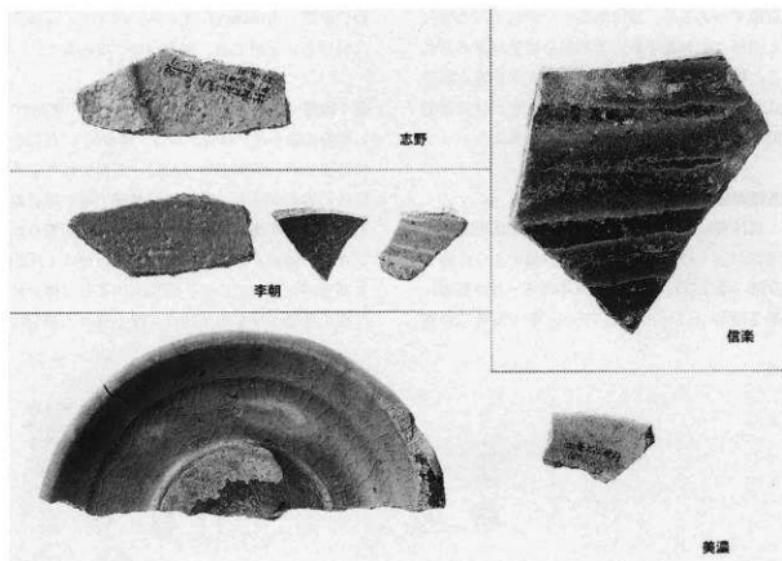


写真34 拝殿建設に伴う出土遺物（9）（その他陶器）

表5 拝殿地下調査区 陶磁器破片点数集計表

種別	土師質土器	白 磁					青 磁						
		皿	柱状高台付环	12C	A期	B期	D期	E期	B1類	B3類	B4類	D類	E類
表上～第1砂層上面	22	11					1	3	1	1	2	5	2
第1砂層下～第2砂層上面	18	3						3					1
第2砂層下	6	2	1										
層位不明	25	11		1	1	1				2	3	2	

青 花						肥前系陶器		肥前焼		肥前系	
碗C群	皿B2群	皿C群	皿E群	繪花皿	不明	(寛文以前)	描鉢	甕	描鉢	甕	
				2			28	2		2	
	1	1	2	2	3	29	4	1	5	2	
									2	1	
1				2		27	4	1	2	10	4

窓器系	美濃	志野	信楽	李朝施釉陶器		その他・不明	
				皿	鉢	陶器	磁器
2	2	1	1		1	19	12
1						17	11
1							
2					2	35	17

定量ずつあるが、国産陶器や土師質土器の傾向と同様に中世後半から遺物量の増加が認められる。集計の対象となった資料の大半が寛文度造成土中出土という性格もあり、とりわけ17世紀前半の遺物量が多いことが指摘できよう。

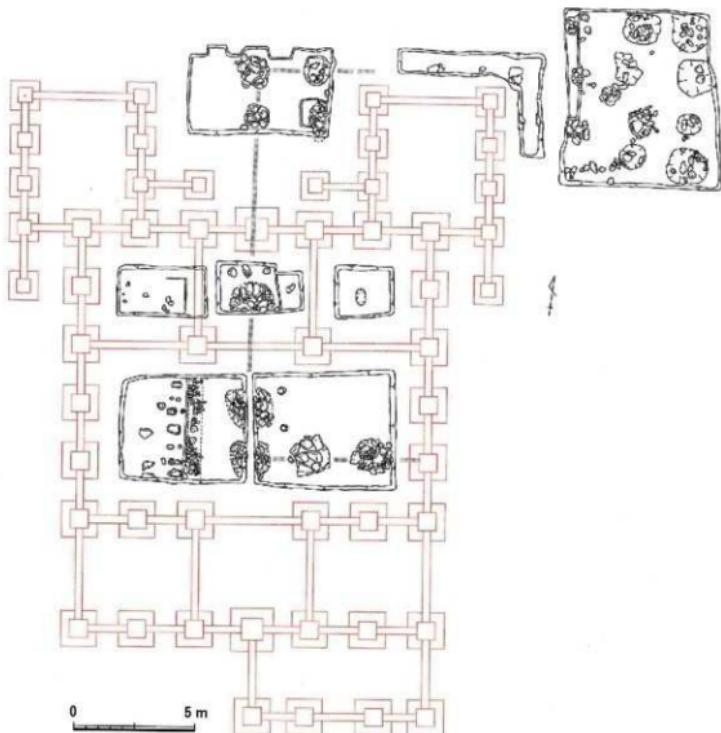
遺構の概要

現拝殿の建っている地下には各年代の遺構や遺物が出土していたため、第11図のように第1段階（延享度）、第2段階（中世末～近世初頭）、第3段階（14～16世紀ごろ）、第4段階（弥生

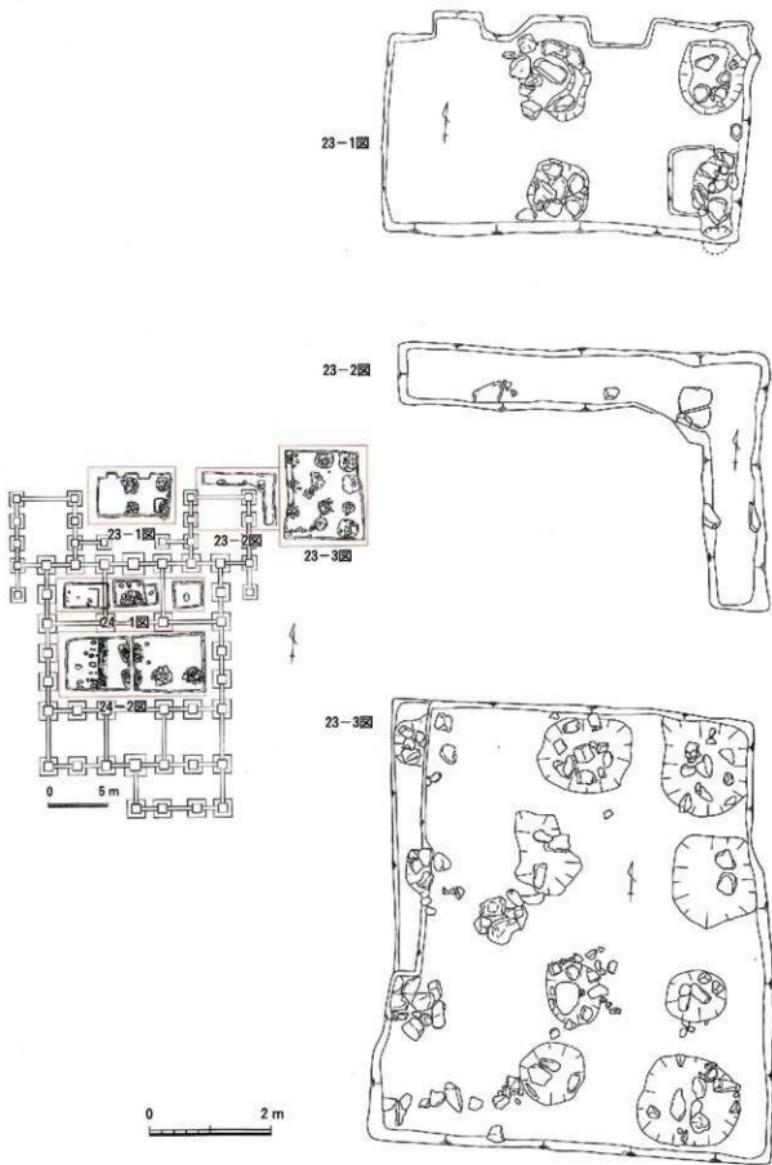
時代前期～古墳時代初頭ごろ）の大きく4段階に分けることができ、調査がおこなわれた。

第1段階（延享度拝殿跡）（第22～24図 写真35）

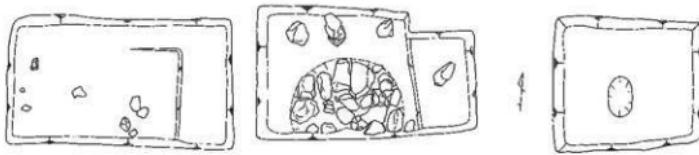
地表に最も浅い部分からは、延享元年（1744）に移築され、昭和28年（1953）5月に焼失した拝殿の礎石が残る。新拝殿の基礎工事の際に礎石はまったく調査されることなく、全部掘り起こされ、撤去されてしまった。したがって詳細な調査がなされたのは、昭和32年9月以降の新拝殿の基礎工事が終了後に基礎と重なる部分に



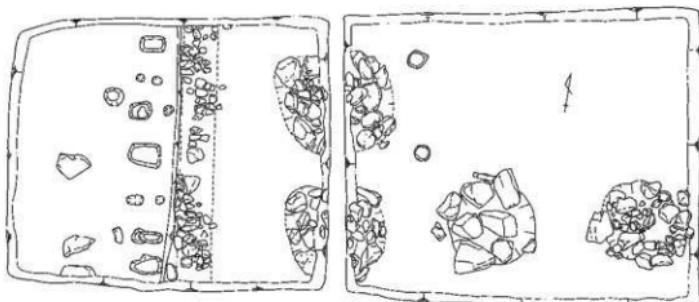
第22図 延享度造営拝殿遺構全体図 (S=1/200) [朱書は現拝殿の基礎]



第23図 延享度造営拝殿造構実測図(1) (S=1/80)



24-1図



24-2図

0 2 m

第24図 延享度造営拝殿遺構実測図(2) (S=1/80)

ついては既に掘り起こされており、これを免れた根石の一部が調査されている。個々の根石の範囲は直径1.5m以上、深さ50~80cm、石の大きさは直径40~50cmに及んでいた。焼失した延享度の拝殿造営には、当時としては大がかりな基礎工事がなされていた。

第2段階（中世末～近世初頭）天正度～慶長度の溝跡・礎石建物跡

地表下1mには5~10cmの砂層が一面に広がっており、遺構面が良好な状態で残されており、

礎石建物跡、石組み溝跡が確認された。

石組み溝跡1（北溝跡）（第26図 写真36）

現拝殿の東西両出小間の北端を横切り、上部を平らな面をなし、40~50cmの2列の列石が東西約25mに延びている。東端は現拝殿の東小間の北東角より約4m東の部分より直角に折れて北に向かっている。溝跡の西の部分は、現拝殿の西で小間の北西角付近まで延びている。現拝殿の西出小間の北東付近より北へ直角に折れて北へ向かっている。この溝跡の東端の一角は半



(延享度拝殿礎石の根石、北から 1957.12.10撮影)



(延享度拝殿礎石跡全景、北西から 1957.12.10撮影)

写真35 拝殿建設時調査状況（2）

成11年度に行われた調査で再度発掘されることとなった。

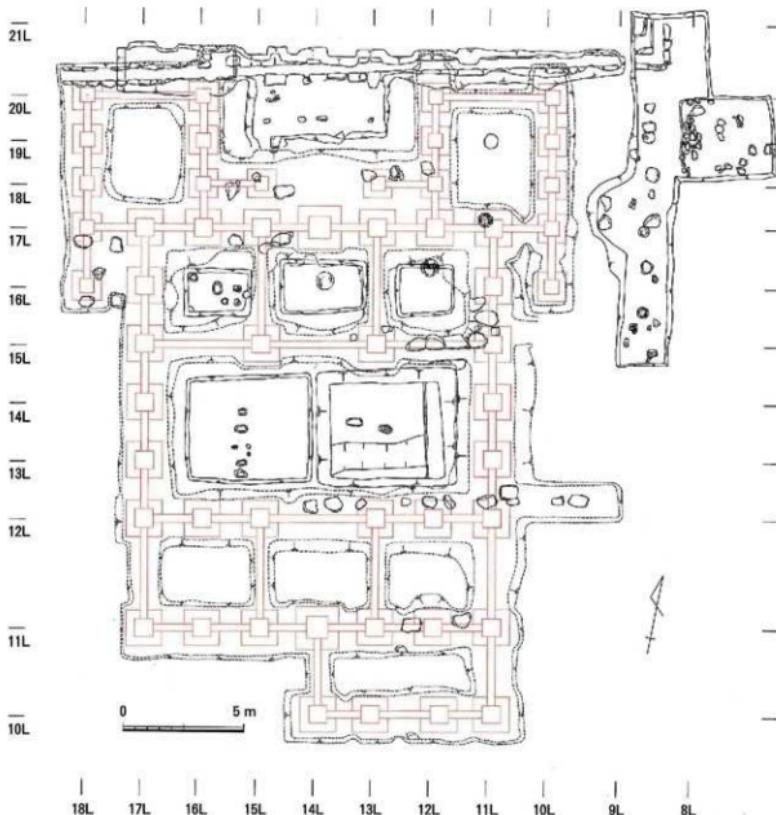
石組み溝跡2（南溝跡）（第27図）

上記の溝跡の南方約12mには、溝跡1に並行するもうひとつ溝跡を検出した。位置的には現拝殿の高間の東南柱の東側にあたる。北側に4個、南側に3個石が連なり、幅40~50cm、長さ3.5mに及ぶ。

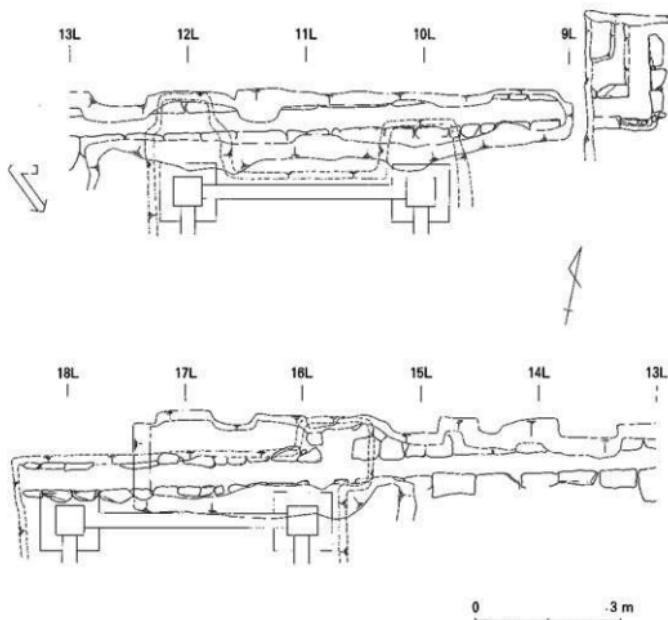
礎石群1（第27図）

溝跡1の東端付近の南方約2.5m地点から南に向けて約2m間隔に直径50~60cmの礎石と思われる石を3個検出された（北より南へA1・A2・A3とする）。そしてA3の南方2mには礎石の掘り方と思われるくぼみ穴1個も発見された。

さらに礎石A3の西2mからも礎石が発見さ



第25図 拝殿地下調査構造全体図（S=1/200）〔朱書きは現拝殿の基礎〕



第26図 挿殿地下調査（天正度～慶長度）溝跡平面図（S=1/100）

れた（礎石B）。ただし、礎石Bの北及び南は未発掘のため、これらに対応する礎石の有無は不明である。

また、礎石A 1の西方12.8m、北溝跡の南方約2.5mの地点からも礎石1個を発見された（礎石C）。

さらに礎石C西方約2.5mに1個、さらにその西方約2mにも1個、そしてこの1個、そしてこの2個の礎石の南方には、さらにそれぞれ2個ずつ礎石があり、この地点で合計6個の礎石が発見された。（この中東側の3個を北よりD1・D2・D3とし、西側の3個を北よりE1・E2・E3とする。）

また礎石C・D1付近の北約1mには、縁の

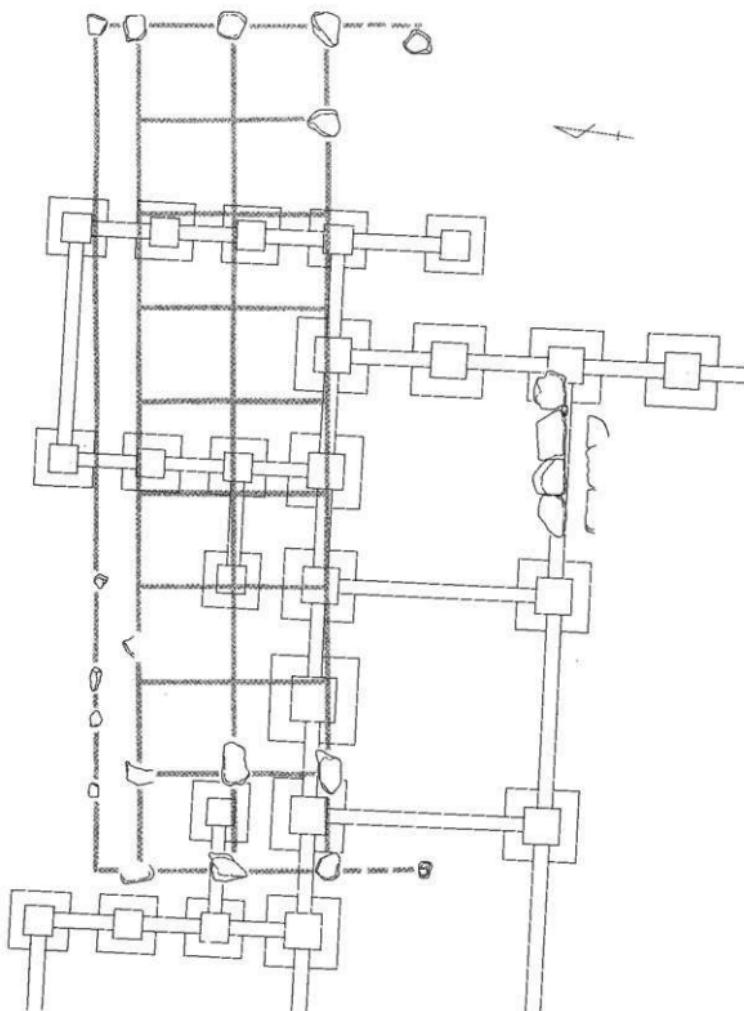
束柱の礎石と思われるやや小さい石3個が認められ、また礎石A 1の北80~90cmからも同様の石1個が発見された。

礎石群2（第27図）

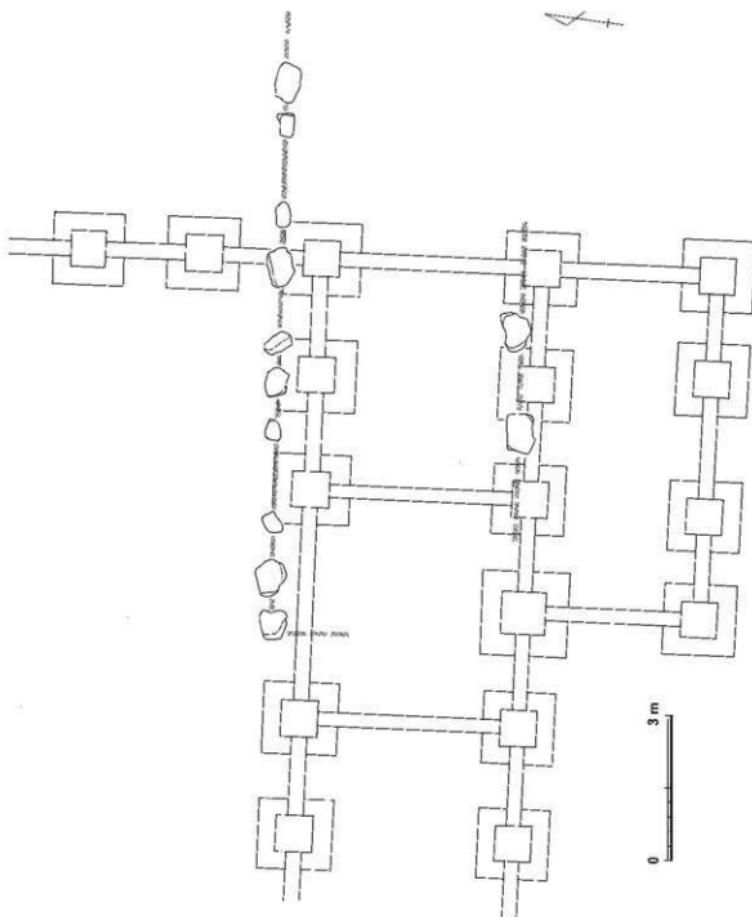
礎石E 3の西方約4.8mにも1個（F 1）、さらにその西1.5mに1個（G 1）、また礎石F 1の南2.4mにも1個（F 2）、G 1の南2.4mにも1個（G 2）の合計4個の礎石を発見された。

礎石群3（第28図）

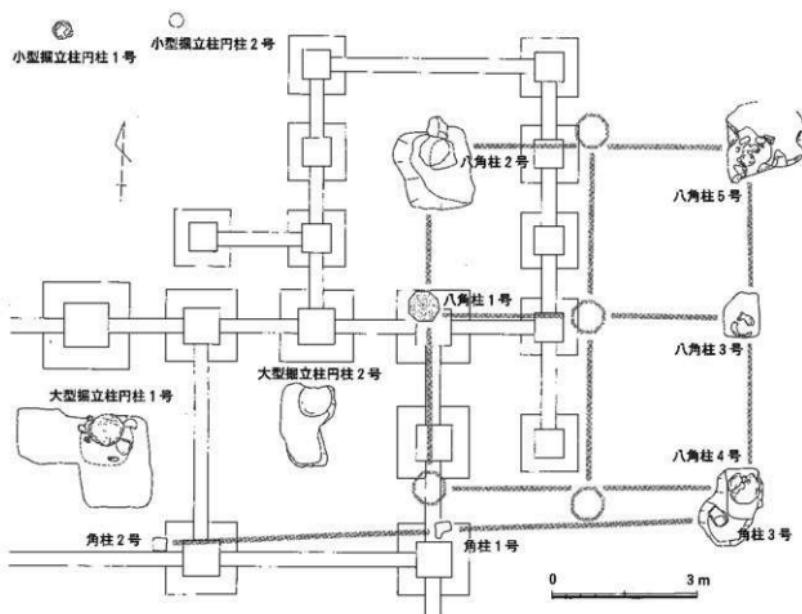
南溝跡の南方約5.8mからも東西約14mにわたり、1列に並ぶ大小の礎石らしきものを発見する。その西端は現挿殿の東邦4.3mまであり、



第27図 拝殿地下調査（中世末～近世初頭）造構図（1）（S-1/100）



第28図 拝殿地下調査（中世末～近世初頭）遺構図（2）（S=1/100）



第29図 拝殿地下調査（14～16世紀頃）建物遺構図（S=1/100）

その東方は未発掘のためわからない。

礎石群4（第28図）

H群の南方約5mにも東方に並ぶに2個の礎石を発見された。

雨落跡（第25図）

礎石H群の北方2mには建物の軒下の雨落跡と思われる、幅約1mの東西に延びる窪み跡が認められた。

第3段階（14～16世紀ごろの本殿跡）

現拜殿の東より、地表下2mから掘立柱建物の柱根が検出された。

八角柱根（第29図 写真37）

現拜殿の東小間の南壁中央付近の地下約2mから直径67cmの八角柱の柱根（1号）が発見され、次いで1号柱根の北3.55mの地下2mからも八角柱（2号）が発見された。さらに1・2号柱根の東方6.6mの地下2mからも北から南へ3.55mの間隔で八角柱の柱根3本が並んで発見された。

これらの柱根は礎盤が据えられていて、柱はこの礎盤の上に立てられていた。1号柱根は工事中に発見されたので、礎盤の有無を確認できなかった、3号は微調整を目的とした杉板を柱底にはさんだものも確認されている。

この建物の北東隅の一角は平成11年度地下祭礼準備室建設時に行った調査で再度発掘するこ

ととなった。既に柱根は取り上げられ、柱穴も完全に輪郭を残さないまま掘りあがっていたが。

この建物の性格について福山敏男氏は以下のように述べている。「昭和32年（1957）冬の発掘調査のとき、現拝殿の東北部にあたるところの地下2mで発見された直径67cmの八角柱の根部5本は、地中に埋めた礎石の上に立っていた。柱間は南北方向で11.7尺（3.55m）であるのに対し、東西方向で約21.7尺（2柱間とみれば1柱間は10.85尺）をはかり、大社造の特色である正方形平面を示さない。当社では本殿以外の掘立て柱としたことがあるとすれば、楼門などであろうか。この八角柱は木口を鋸でひき切ってあったので、後記の円柱より新しく、室町時代ごろとみてよさそうである。」と述べている。

掘立柱大型円柱（第29図 写真38）

前記の八角柱よりさらに深く、地表下2.6mから大型の円柱2基が検出された。直径67~76cmと非常に大型で、高さ50~60cm残存していた。柱穴内には礎盤などの施設はなかった。2基の柱は東西に並び、柱間距離は4.46mであった。この掘立柱大型円柱について福山敏男氏は「2本だけであるから、昔の本殿のものであるかどうか断定しにくいが、柱間は鎌倉時代の記録から考えられる本殿のそれに大体適合している」と述べている。

掘立柱小型円柱（第29図 写真39）

現拝殿東西両出小間の中間やや北より直径約40cm、柱間隔2.4mで東西に並んで2基確認された。いずれも長さ45cm、幅40cmの杉板の礎盤の上に立っていた。

掘立柱角柱（第29図 写真39）

現拝殿の高間の東南柱付近の地下1.8mから約25cm角の角柱の柱根が確認され、東西に5.8mの等間隔に角柱の柱根が確認された。いずれも柱底から50cm残存していたようである。

第4段階（遺物包含層）

上記の掘立柱掘り込まれている基盤層の中には、遺物を包含する土層が確認されている。大國一雄氏の報告によれば、「弥生土器を包含する黒土層」と縄文土器を包含する褐色土層」が認められている。黒土層は地表下2.1m以下に20~30cmの厚さをもって堆積しており、この層からは土師初期のから弥生前期に至る土器や木炭細片等が豊富に発見された」とされる。前述した遺物の概要の項や、平成11年度調査のところで紹介するように古墳時代初頭前後の土器がまとまって出土しており、この黒色土出土に相当するとみられる。

この黒色土の下には「砂利混じり褐色土」が認められたが、拝殿建設時の調査ではこの褐色土はごく一部に限って調査されたため遺物は出土していないが、昭和30年（1955）の貯水タンク建設時と昭和43年の地下室増設工事の際に出土したことを考慮すれば、境内のかなり広範囲にわたり、縄文土器を包含する褐色土層が広がっているものと大國氏は推定している。

参考文献

- 出雲大社 1956『山雲大社國寶防災施設工事報告書』
- 出雲大社 1986『拝殿地下調査報告書』
- 大社町史編集委員会 2003『大社町史』史料編（民俗・考古資料）大社町



2



1



3



4

1：北側の溝跡

2：同、西から

3：北側の溝跡東端屈折部、北から

4： 同 、東から

(天正度、慶長度の石組み溝跡、1957.12.20撮影)

写真36 拝殿建設時調査状況（3）



(側面)

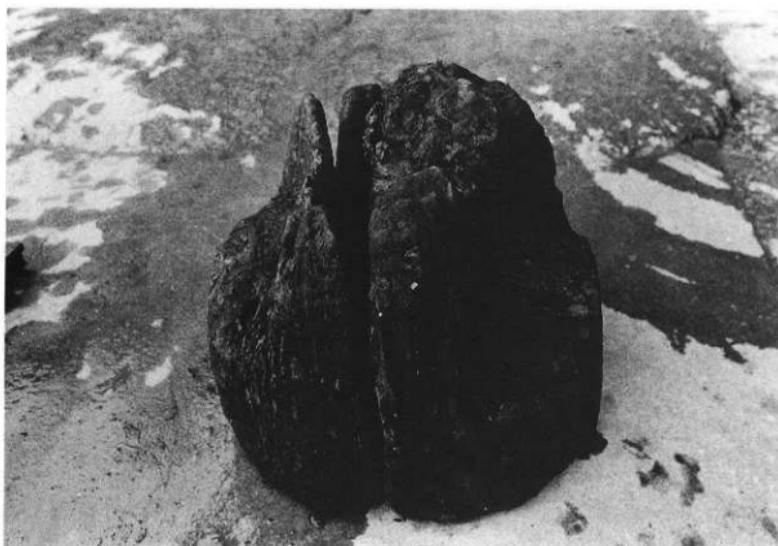


(上面)



14~16世紀の本殿柱根（八角柱1号：底面）

写真37 拝殿建設に伴う出土柱根（1）



(側面)



(大型掘立柱円柱2号：底面)

写真38 拝殿建設に伴う出土柱根（2）



(角柱2号)

(角柱1号)



(小型円柱1号)

写真39 拝殿建設に伴う出土柱根 (3)

第3章

発掘調査の概要

第3章 発掘調査の概要

1. 調査区の概要

各発掘調査区についての概要を記す。

【地下祭礼準備室建設に伴う調査】

調査区の位置

八足門南側、地下祭礼準備室建設予定地の450m²。

目的

地下祭礼準備室建設に伴う事前調査。

調査の成果

- ① 大型本殿遺構に関連すると考えられる疊集中遺構を検出。
- ② 室町・戦国時代頃の木殿跡および玉垣を確認。
- ③ 玉類・手捏ね土器とともに古墳時代前期の土器が多量に出土。
- ④ 慶長度本殿階段跡を確認。

調査期間

平成11年9月1日～平成12年3月31日

【八足門前の調査】

調査区の位置

平成11年度から継続して地下祭礼準備室建設に伴う調査部分を平成12年度に調査。巨大柱遺構（宇豆柱）が検出されたため、さらに、調査区を北部・西部に拡張して調査。また、平成13年度には、心御柱柱穴周辺を調査。調査面積は、650m²。

目的

大型本殿遺構に関連する遺構の有無を確認すること。八足門前における基本層序を把握すること。

調査の成果

- ① 大型本殿遺構を確認。巨大柱を3箇所から確認したことにより、本殿規模を確定。
- ② 宽文度の拝殿跡と考えられる土坑を1基確認。

- ③ 慶長度本殿跡と考えられる土坑を4箇所確認。

調査期間

平成12年4月3日～11月16日及び平成13年7月18日～11月9日
※報告編では、第5章で近世以降の遺構について、また第6章で大型本殿遺構と分けて記述した。

【彰古館北の調査】

調査区の位置

現本殿北側・彰古館北東部に調査区を設定。調査面積は、95m²。

目的

発掘調査が行なわれていない境内北部域での境内遺構面の変遷を確認すること。

調査の成果

- ① 境内北部域が境内面として利用され始めたのは中世以降であることを確認。
- ② 繩文晚期の土器が出土していることから、北部域においても、縄文期から人の活動を確認。

調査期間

平成13年12月3日～平成14年2月22日

【拝殿南の調査】

調査区の位置

現在の拝殿の南側に調査区を設定した。調査面積は、70m²。

目的

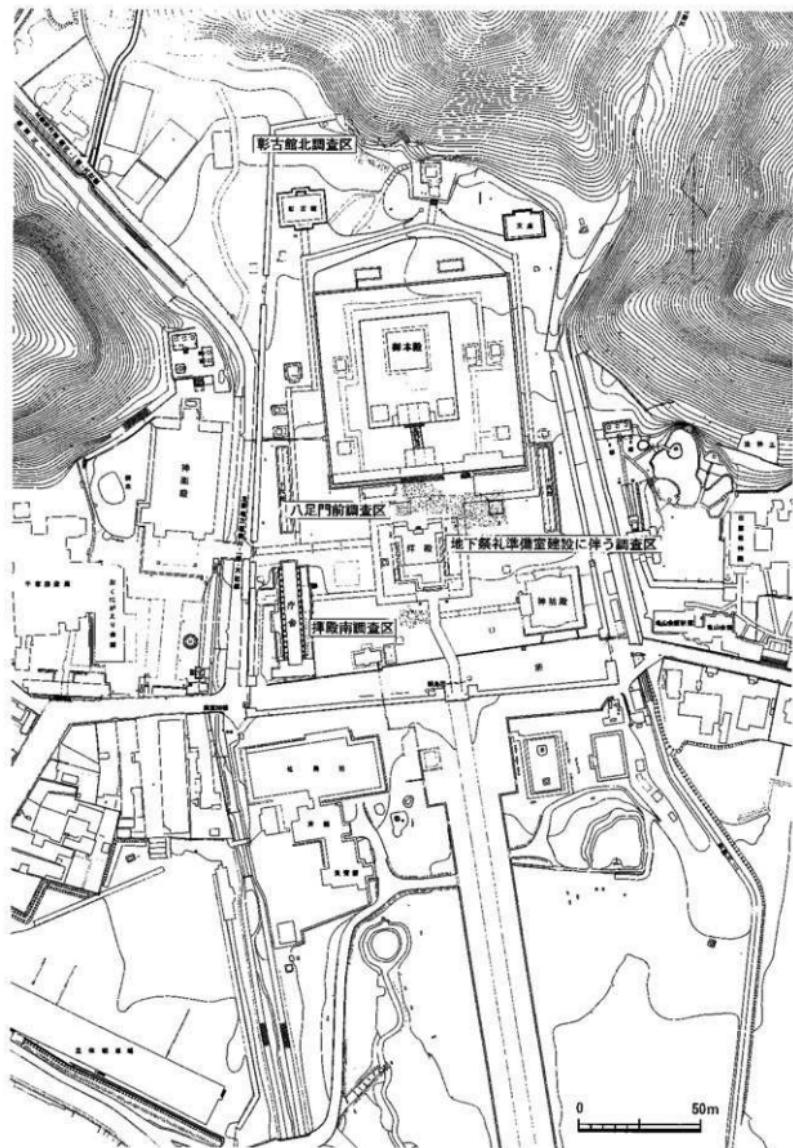
巨大本殿に関連する遺構の有無や、境内中央部における境内遺構面の変遷を確認すること。

調査の成果

- ① 慶長度の建物跡（御供所）と考えられる基壇及び土坑を確認。
- ② 7世紀後半代から8世紀前半代に機能したと考えられる流路1基を確認。

調査期間

平成14年6月3日～12月24日



第30図 調査区の位置 (S = 1/2,000)

第4章

地下祭礼準備室建設に伴う調査

第4章 地下祭礼準備室建設に伴う調査

調査の経過

平成11年9月からは、当遺跡があらためて注目を集めるきっかけとなった発掘調査がはじまることとなる。調査に到る経緯は第2章1節で述べたとおりである。建設予定地は境内地のほぼ中央、拝殿北側にある既設の地下室に連結する形で、建設予定地約450m²が発掘調査の対象となった（第30図）。本殿を囲む瑞垣と拝殿とはさまれた東西に細長い調査区を鉄製の矢板で囲み、緊急発掘調査を実施した。

調査区が境内中央に位置すること、また第6回示したとおり隣接する拝殿の建設時に既に多くの遺構が確認されていることから重要な施設に関わる遺構の出土が充分予想され、調査を慎重に進めた。平成11年9月に着手した調査は、正月行事による休止期間をはさみながら進めら

れ、後に慶長本殿の階段跡や可能性が指摘される近世初頭の礎石建物や中世の掘立柱柵列（垣）の柱根列などを確認している。平成12年2月には調査区北西端の地表下1.5mで大規模な疊が集中する遺構が検出され、その規模の大きさと境内中軸線上に位置することなどから本殿に関わる重要な遺構と判断されるに到る。詳細については平成12年度調査のところで述べることとする。

また調査区東端では古墳時代前期末の勾玉、臼玉など祭祀との関連性がうかがえる特殊遺物など、遺跡の重要性があらためて指摘されるようになった。こうした事態をうけて出雲大社は平成12年3月をもって地下祭礼準備室の建設計画を中止され、遺構を保存することを決定された。



写真40 平成11年度調査区全景

調査方法

調査に当たっては第32図のように、東西に任意の座標軸を決め、東西座標軸を0とし、北側を東から西へ1N、2N……7N、南側を東から西へ1S、2S……6Sとしグリッドを設定した。調査は平成10年10月に行った試掘調査や、過去に数回にわたって行われた発掘調査を参考に、遺物包含層に至るまでの表土から約30~40cm程度を重機で掘削し、それ以下の層については人力で精査した。

基本層序（第31図）

出雲大社境内地の背後の北山山系からは、急傾斜の谷筋を素戔川と吉野川が流れ、扇状地を形成している。特に古墳時代後期～平安時代には大規模な土石流により境内に土砂が厚く堆積している。その後も度重なる土石流により土砂が堆積、または造構面が削平されている時期もある。このようなことから包含層、造構面の遺存状況が悪かったと考えられる。矢板の上端が現地表であるが、1層までの約40~60cmは表土及び寛文の造成土にあたる。しかし、電気・水道・排水等の地下埋設物によりかなり搅乱を受けしており、正確な層位を示すことはできなかった。

造構に伴わない遺物の概要（第33～35図 写真41～47）

第33図1・2は須恵器蓋環で、1は内面に段を有し外面天井部にはケズリ跡がある。3～5は环身である。6は土師器底部である。7は土師器环で回転ナデを施し、底部は回転糸切り痕がある。8～15土師質土器柱状高台付环である。16～38は土師質土器皿である。

第34図1は青磁碗で口縁部は直立気味に立ち上がる。2は白磁碗で口縁部が外反し、体部は丸みを持つ。3も白磁で玉縁が大きく体部の器肉が厚くなる。5～8は肥前系の磁器である。9～11は肥前系の陶器である。12～14は錢貨である。12・13は渡来銭である。13は後述する中世本殿造構盤付近から出土した。平成11年度

調査で錢貨が唯一造構に伴って出土している。14は古寛永である。法量は表6のとおりである。第35図は大型始刃磨製石斧である。長さ14.6cm、径5.6cm×4.2cmで斧身が厚く直線的である。基端に敲打の使用痕あり、刃部は欠損している。

石列（第36図）

調査区の最東端の地表下約40cmでは、南北に継続するように長さ6.5mにわたり、平均直径60cm位の自然石が一直線上に連なっている石列を検出した。東側の面を比較的平らに揃えられているため、石垣の根石ではないかと思われる。地表から列石のあるところまでは、17世紀初頭から古墳時代の各時期の遺物が包含されているので、この列石は少なくとも17世紀初頭以降の新しい時期と思われる。

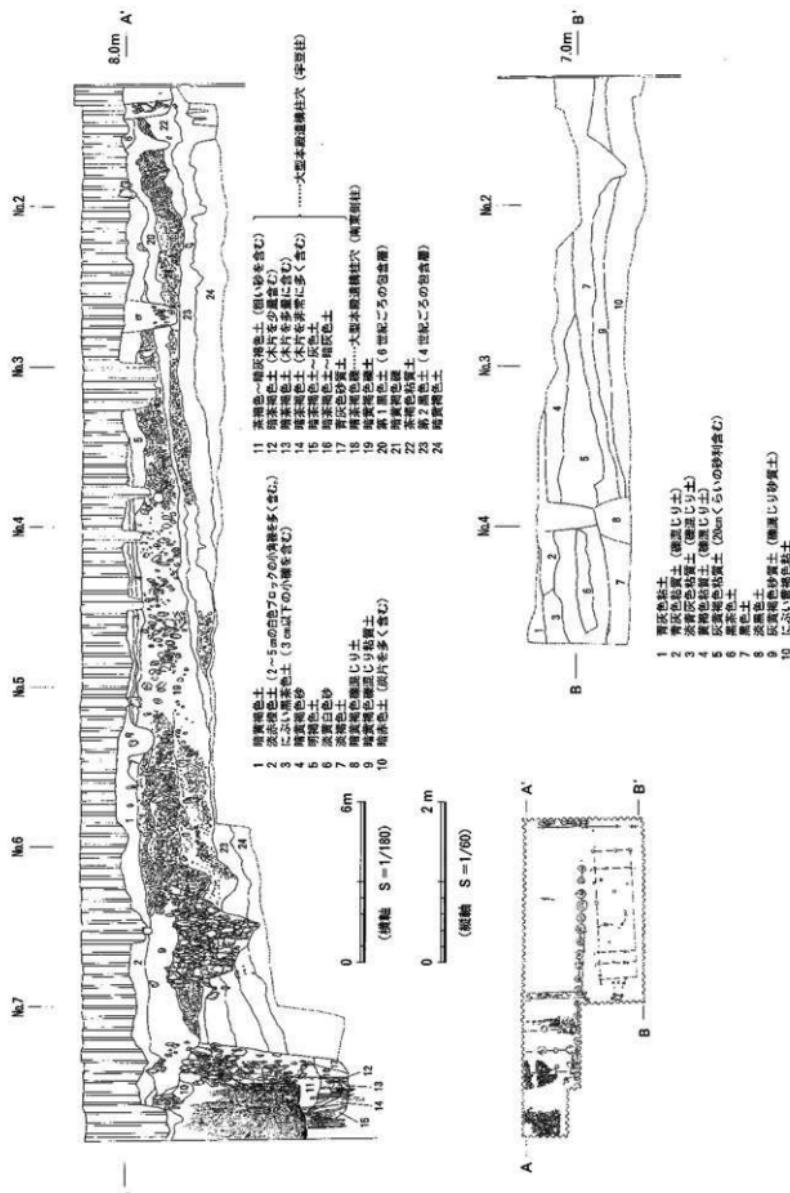
柱穴（第37図）

調査区の1S区から西へ4S区にかけて、現地表下約1.2m、標高7.3mから柱穴を21基検出した。大きいもので径が約40cm、深さ約20cmと小規模である。中には直線上に數基並ぶものもあり建物だとすれば梁間4.6m×桁行16mの規模をもつものを1棟確認している。柱穴だと若干浅いと思われる所以、洪水等により造構面の上面が削平されたため、実際の掘り方を確認できなかった可能性がある。出土遺物はなく、明確な年代を明らかにすることはできない。

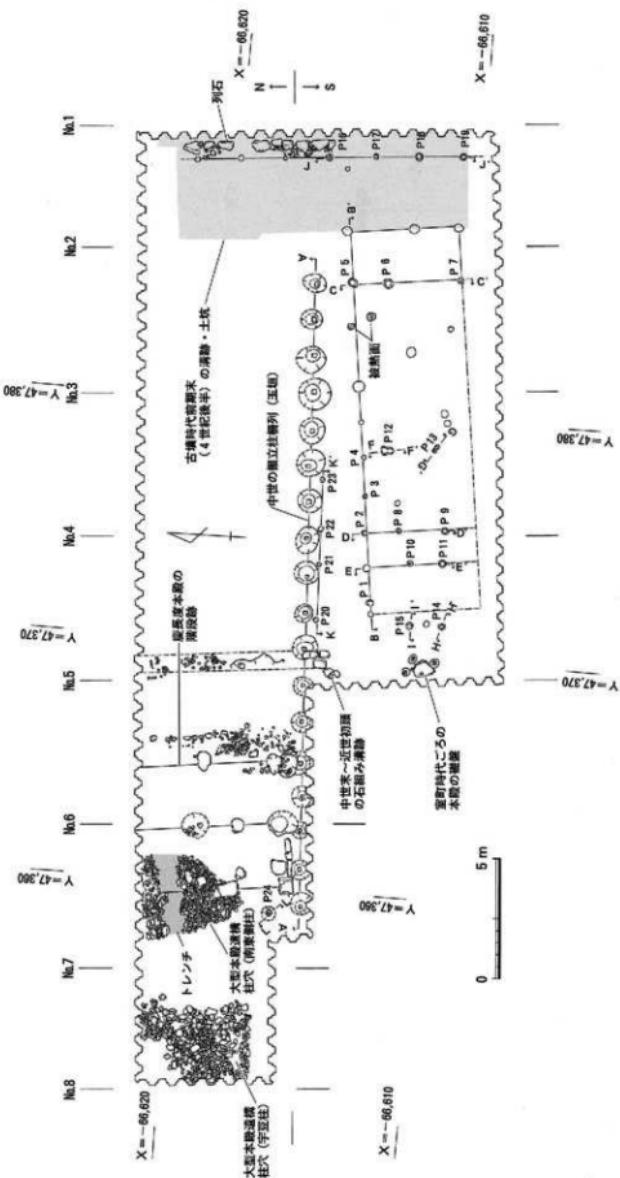
また6Nからは現地表下1.3mで柱穴を1基検出している。柱穴内には柱根があり、柱底から47cm残っており、27cm角の角柱である。出土遺物はなく、明確な年代を明らかにすることはできない。

慶長本殿階段跡（第38図 写真49）

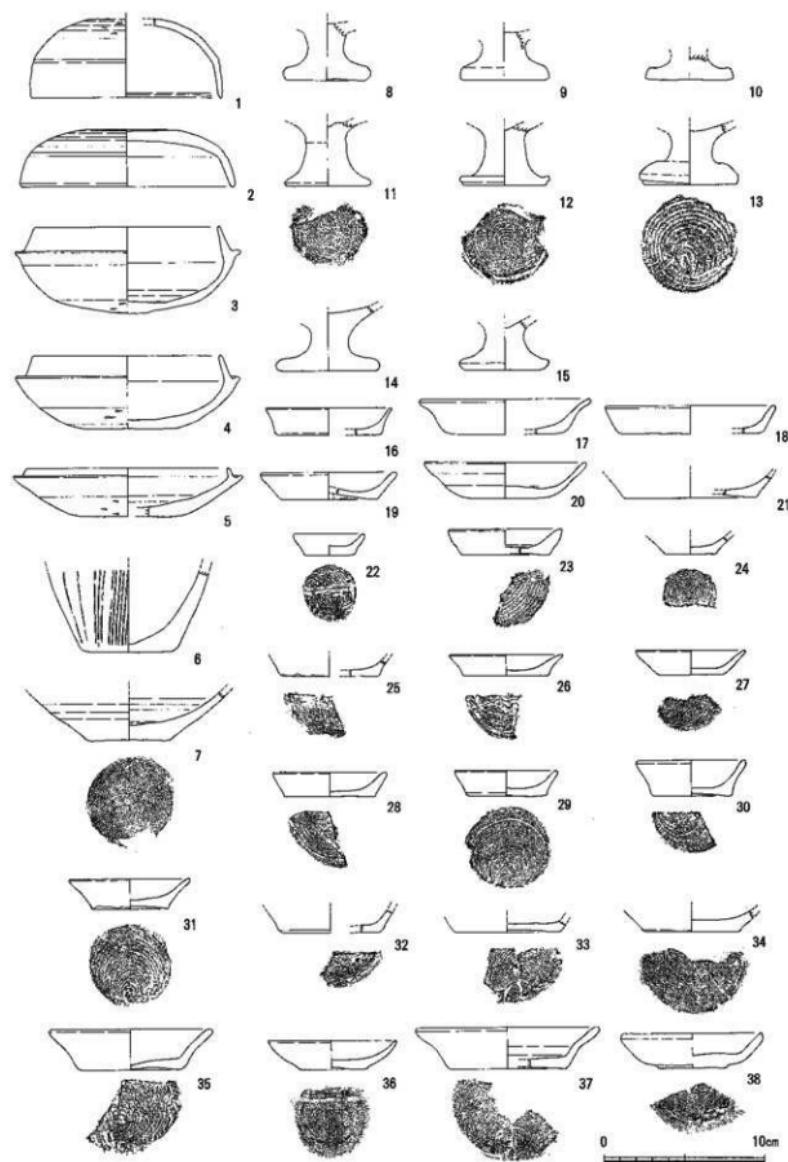
調査区6Nの現地表下約40cm、標高8.0mにおいて、長さ約1m～0.3m、厚さ45cm～10cmの礎石列と礎石を据えたと考えられる柱跡4箇所を検出した。さらにその東側70cmには、10cm前後の礎が礎石列と並行し、一直線上に連なって



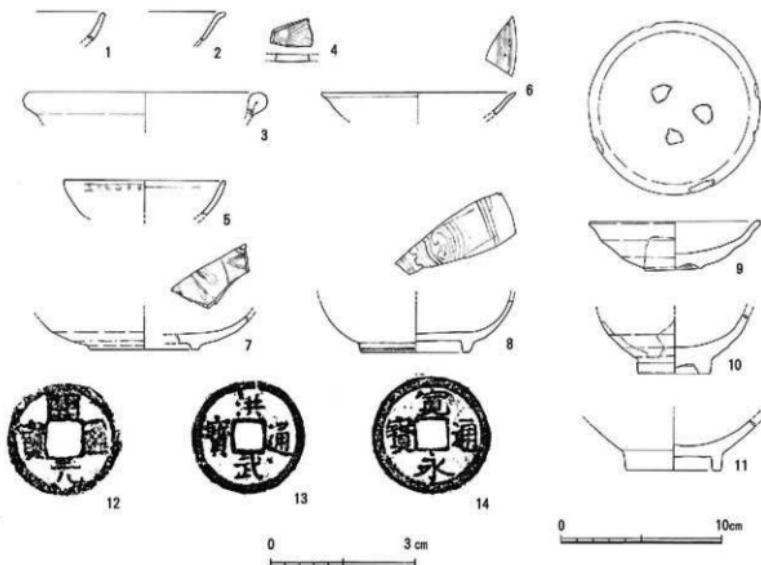
第31図 平成11年度調査区土層図 (横軸 S = 1/180 縦軸 S = 1/60)



第32図 平成11年度調査区全体図 (S=1/200)



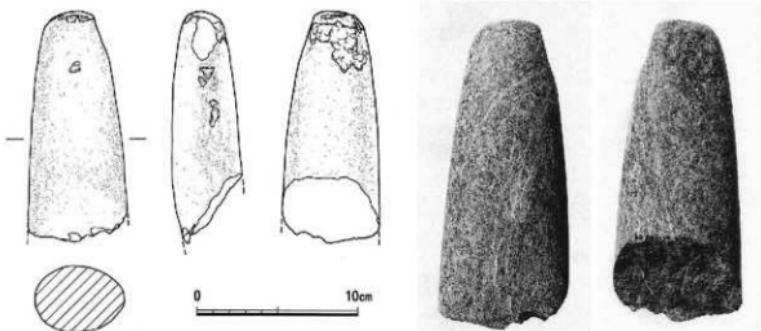
第33図 平成11年度調査区 包含層出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第34図 平成11年度調査区 包含層出土遺物実測図(2) (遺物はS=1/3、銭貨は実大)

表6 平成11年度調査区 出土遺物(銭貨)観察表

銭名	初鋤年	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目(g)	(単位mm)
開元通寶	8450	23.40	23.45	2.10	19.30	1.05~1.30	2.05	
洪武通寶	1368	23.35	23.35	19.65	19.00	1.60~1.70	3.61	
寛永通寶	1636	24.40	24.40	20.20	20.10	1.00~1.25	2.07	



第35図 平成11年度調査区 出土遺物実測図(3) (S=1/3)

写真41 平成11年度出土遺物(1)

いる礫群を検出した。これら礫群は、礫石列に伴う基壇の一部であると考えられる。

柱跡は、上端平面径が1.1m～0.6m、深さ約20cmと比較的浅い。礫石の下部構造については、残存状態が悪く確認できなかった。

後の平成12年度調査において礫石列の北側で慶長度本殿とみられる柱跡が確認されており(第5章第3節参照)、位置関係からみて慶長度本殿に伴う附段跡であると考えられる。

天正度～慶長度の溝跡（第32図）

現地表下約80cm、標高7.6mから昭和32・33年の拝殿地下調査時にすでに検出された天正度～慶長度の北溝跡の東端北東角から直角に折れて北に向かっている部分を今回の調査によってあらためて確認した。第6図に示したとおり平成11年度調査区と拝殿地下調査区が重複している部分にあたる。

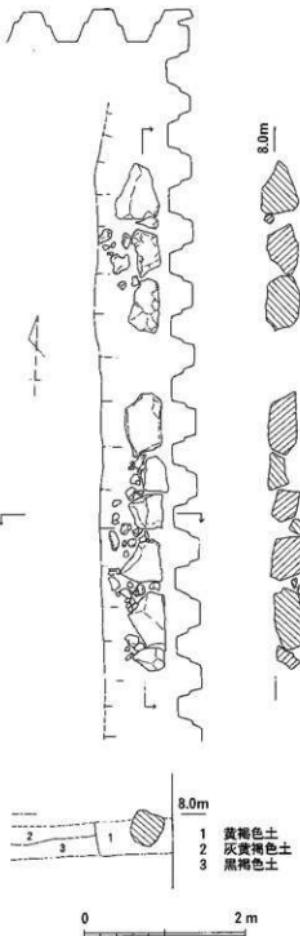
中世本殿造構礎盤（第39図）

現地表下1.8m、標高6.8mから拝殿地下調査時にすでに検出された中世本殿の柱の礎盤が、今回の調査によってあらためて確認した。第6図に示したとおり平成11年度調査区と拝殿地下調査区が重複している部分にあたる。

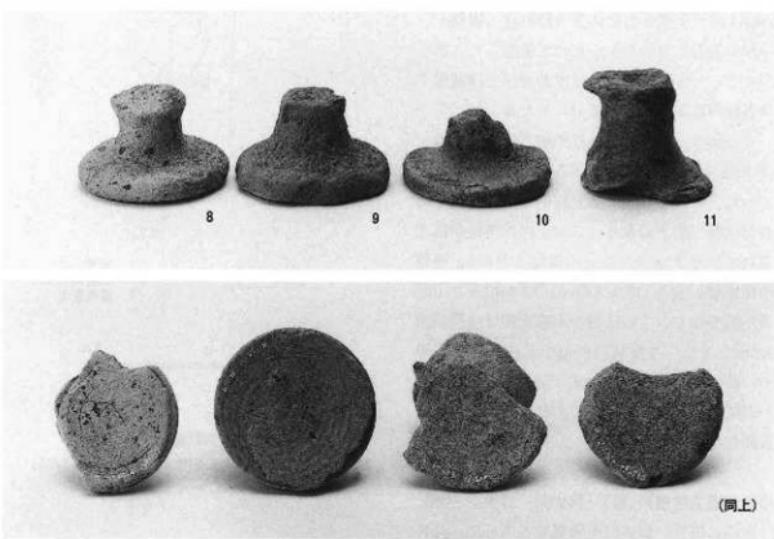
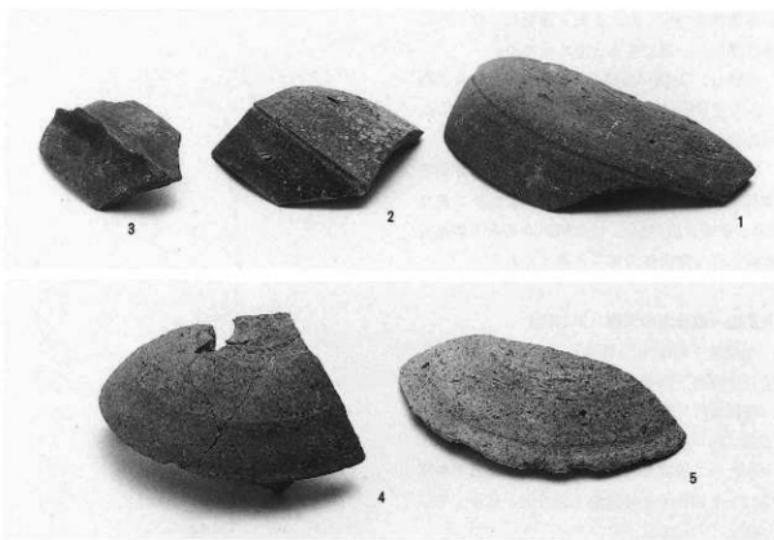
この礎盤とその周辺は拝殿地下調査終了後、厚さ50cm位砂で覆土するように埋め戻しがされていた。それを除去し掘立柱の柱穴底に据えられた状態で出土しており、この上に八角柱が据えられていたようである(八角柱5号柱)。礎盤の規模は、長さ110cm×85cm、厚さ40cmで上面は平坦である。この礎盤の本殿規模は柱間が約3.5mであり、本殿規模が縮小した時期の本殿の一部であると考えられる。時期は、洪武通宝が礎盤付近から1点出土しており、14世紀後半以降の可能性が高い。

中世の掘立柱柵列(垣)（第40図 写真52・53）

東西に細長い調査区を縦断するように、長さ25.8mにわたって一直線上に並ぶ柵列が確認さ



第36図 平成11年度調査区
石列平面図・断面図 (S=1/60)



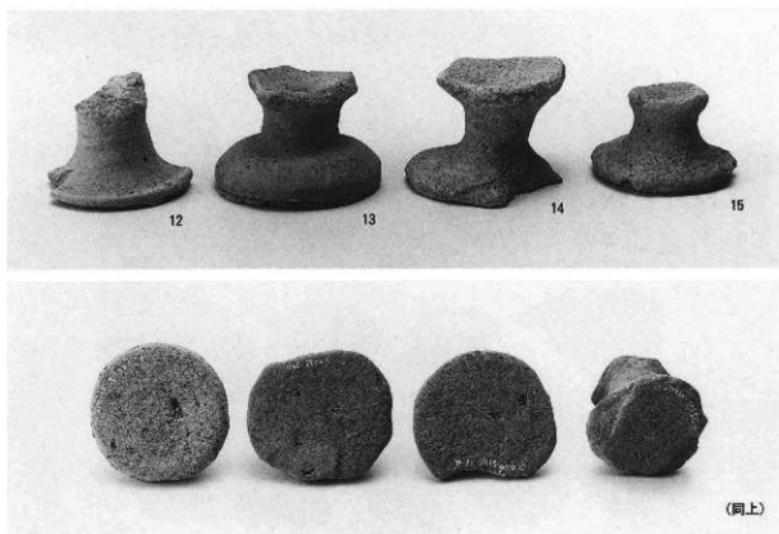


写真44 平成11年度出土遺物（4）（番号は第33図に対応）

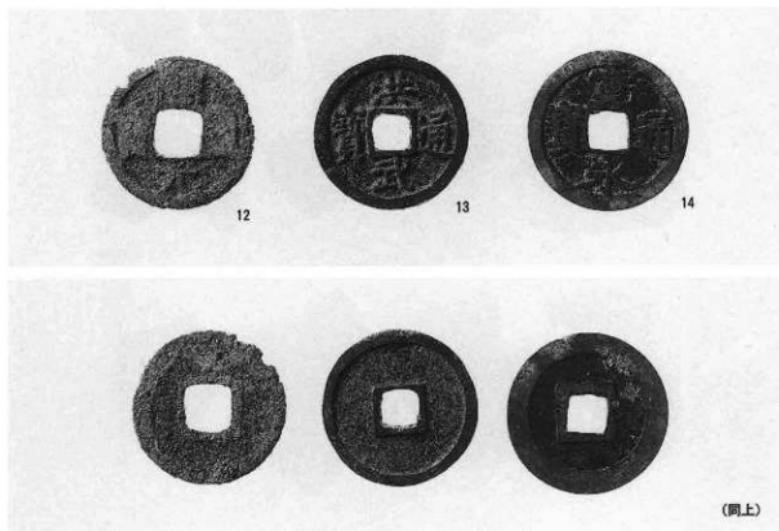


写真45 平成11年度出土遺物（5）（番号は第34図に対応）

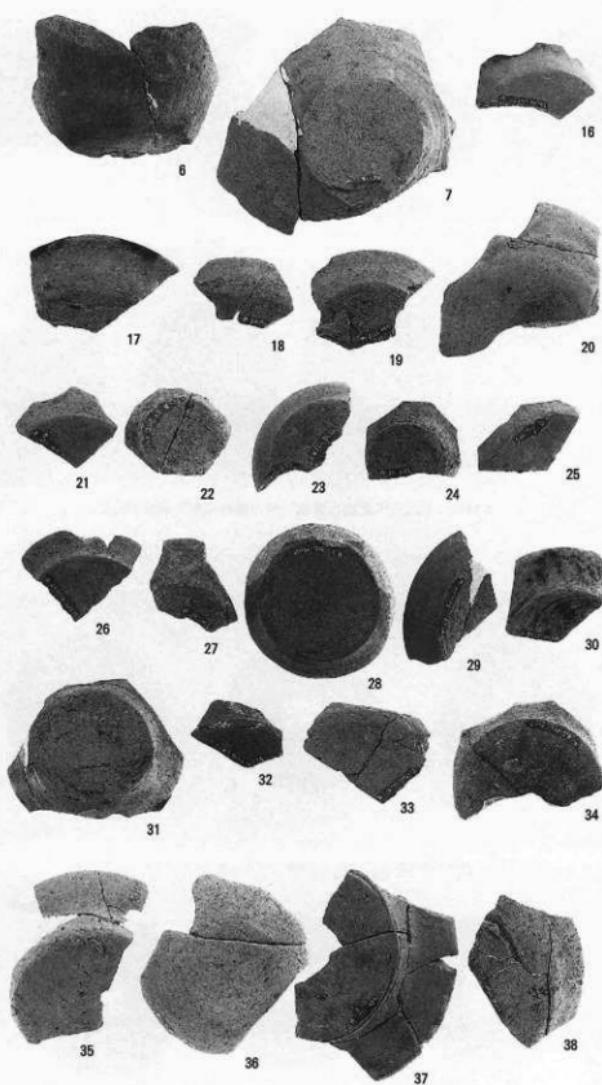
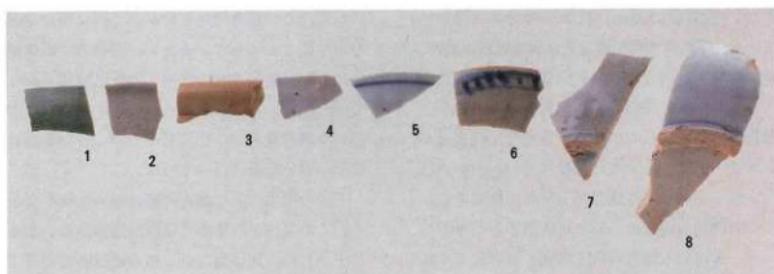
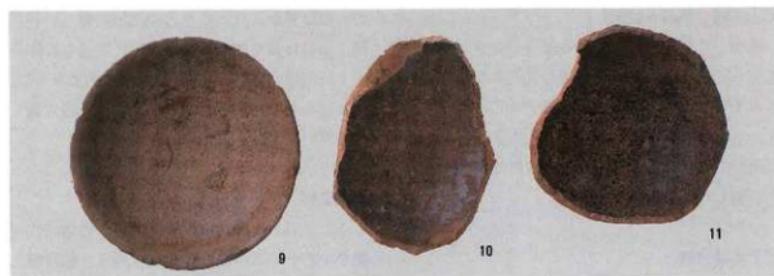


写真46 平成11年度出土遺物（6）（番号は第33図に対応）



(同上)



11



(同上)

写真47 平成11年度出土遺物(7)(番号は第34図に対応)

れた。柱間隔は150cm、柱間17間分が確認されている。柵列の西側延長は更に調査区外に続き、東側は調査区内で止まっている。これが南北のどちらかに折れて続いている可能性もあるが、調査では確認されていない。検出面は地表面から深さ1mで、柱穴内には長さ20~80cm分の柱根が残っていた。柱根は15cm角の角柱である。

この柵列の時期については直接手がかりがないが、後述する鎌倉時代宝治度と思われる本殿遺構の検出面を切っていて、かつ近世初頭の慶長度遺構に覆われていることから、大まかに中世のものと判断される。その機能について確証はないが前述した昭和32・33年の拝殿建設時に検出された14~16世紀ごろの本殿の主軸とそろうこと、またこの本殿跡と同様に柱穴内に柱根がすべて残されていたことなどからみて、両者が同時期に伴うもの可能性が高い。その場合、この柵列は本殿を囲繞・隔絶する最も内側の「玉垣」と呼称する垣に相当するとみられる。

出土柱根（第41~45図）

出土した柱根の残っている部分の長さは、柱底から20~80cmである。風化が進みかなり侵食されているため、加工痕を確認することはできなかった。後述するが樹種を17本中8本無作為に選び分析した結果、すべてクリ材であることが判明した。（第18章参照）

大型本殿遺構

調査区北西部の現地表下1.3m、標高7.3mで大規模に礫が集中する遺構が2ヶ所検出され、その規模の大きさと境内中軸線上に位置することなどから本殿に関わる重要な遺構と判断した。平成12年度には礫集中遺構から3本の柱材を1本に束ねた巨大柱が出土した。この遺構については、第6章で詳述する。

古墳時代前期の溝跡・土坑（第46図 写真54）

調査区の東端約50mの範囲では、古墳時代初頭を中心とする時期の遺物包含層が面的に検出

された。この包含層は東側が高く西に向けて緩やかに低くもぐっているため、調査のため機械的に水平に掘り下げた結果、調査区東端に限って検出している。なお、これ以西については調査が上層の段階で中止されたため、この包含層についての調査は行っていない。

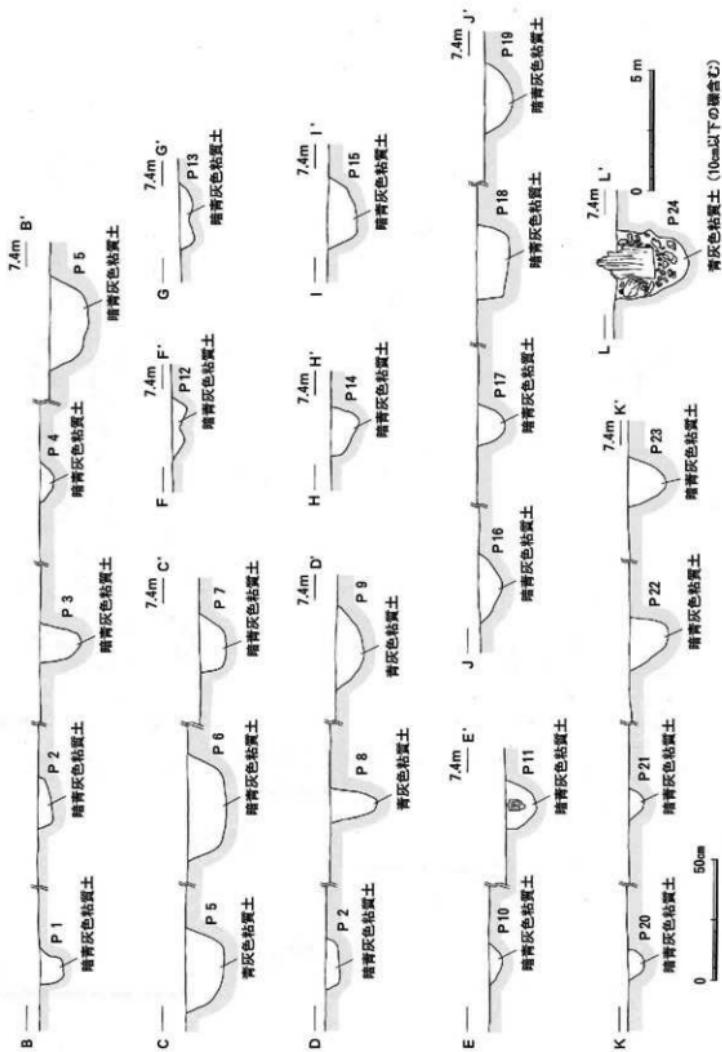
上記の理由により調査面積は極めて狭小ながら、この周辺から極めて重要な遺物が高い密度で出土した。瑪瑙製勾玉1点と蛇紋岩製勾玉1点、滑石製臼玉12点、手捏ね土器1点である。これらの遺物は包含層のはば最上層と、包含層上面から掘り込まれた溝の埋土中から出土している。溝の幅は約80cmで西から東に直線的に走り、調査区東壁近くで直角に折れて南に続く。溝の西側延長部分は保存が決定し未調査のため、また南側延長部分は既に調査による掘削が進んでいたため確認されていない。L字形の溝に囲まれる内側には、溝と同様に包含層上面から掘り込まれた小規模な土坑がいくつか検出されが、建物の柱穴と考えられる規則的な配置をもつものは無かった。これらの土坑の他に、包含層上面には強く被熱して赤褐色に変色した部分が1か所認められた。その性格は不明であるが、掘り込みを伴う炉等ではなく、開放状態で強く火を焚いた痕跡とみられる。

出土遺物（第47~52図 写真55~58）

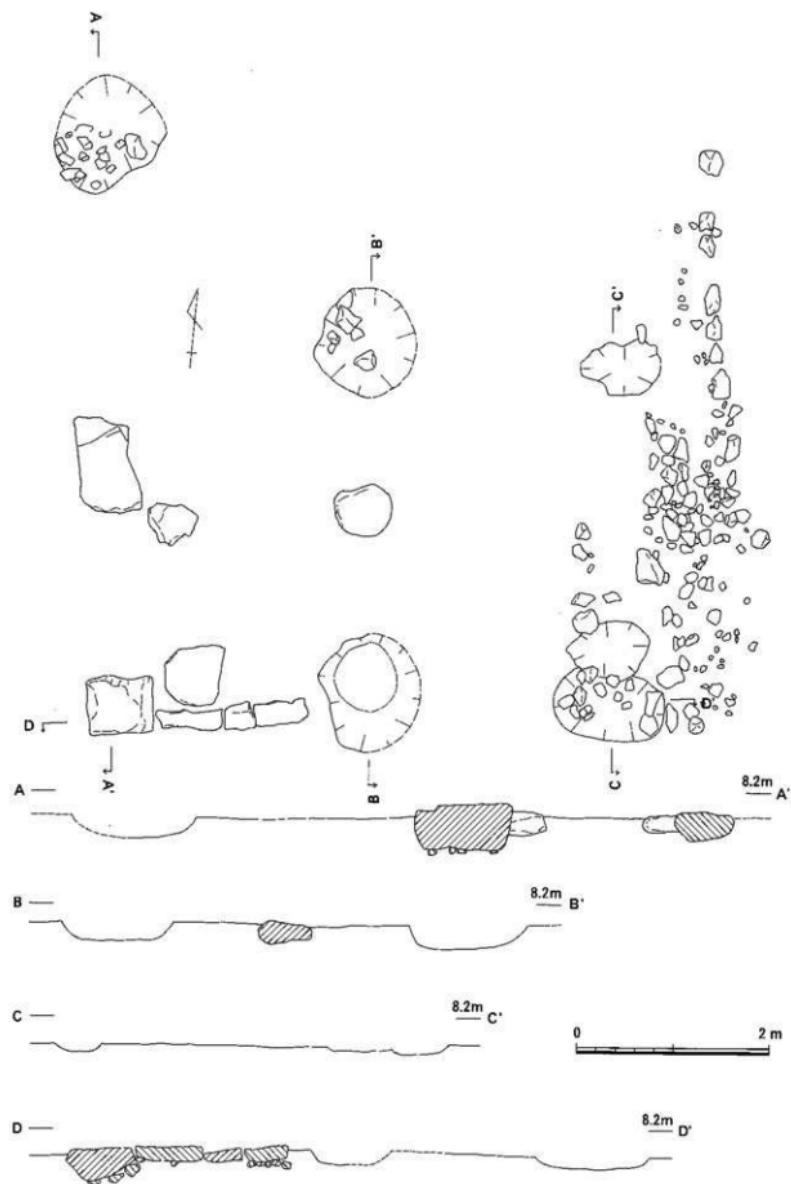
ここで示した遺物は調査区東端の古墳時代前期を中心とする時期の遺物包含層と、包含層上面から掘り込まれた溝の埋土中から出土した。第47図1~8の土器は弥生土器の壺で口縁部外面に凹線文または並行沈線文を数条施したもので、肩部に5は波状文を廻らされ、6は列点文を施す。これらの土器は松本編年IV~V様式に当たる。

第47図9~15は土師器の壺である。口縁部はヨコナデ、頸部に9~12のように羽状文を廻らせ、1条の沈線文を施したものがある。時期は草田編年6・7期に相当する。

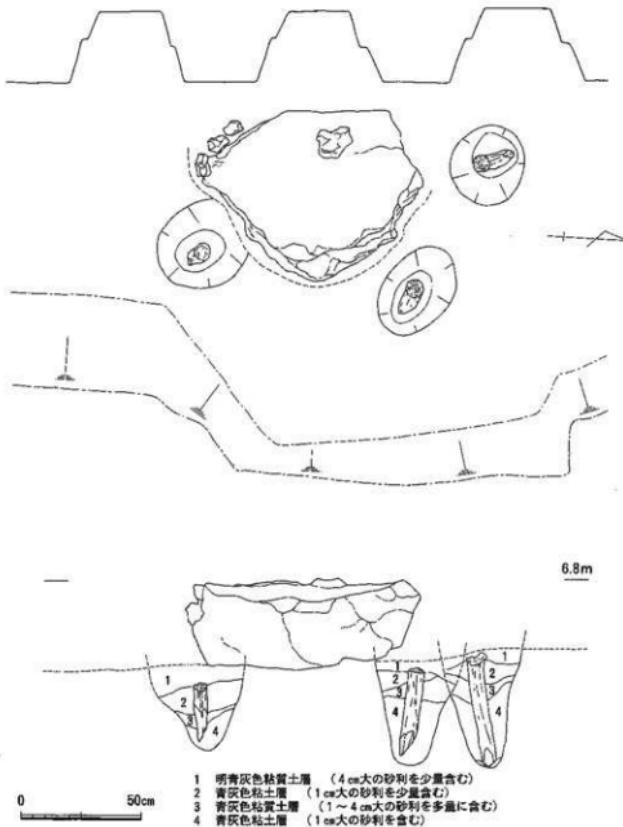
第48図は複合口縁を持つ壺である。口縁が外



第37図 平成11年度調査区 柱穴断面図 (P1~P21は S = 1/20 P22は 1/40)



第38図 平成11年度調査区 廉長度本殿階段跡構面平面図・断面図 (S=1/50)



第39図 平成11年度調査区 中世本殿造構盤平面図・立面図 (S=1/20)

反し先細りになる古い様相を持つものや、口縁部を外側に折り曲げるものの、口縁上端部で平坦面をつくるものに分けられる。口縁部は外外面ともヨコナデ、内面頸部はヘラケズリが施されている。時期は草田編年4期～6・7期に当たると思われる。

第49図は単純口縁を持つ布留傾向の甕である。外面はハケ、内面はヘラケズリが施されている。底部の中には古い様相の土器も含まれていると

思われるが、草田編年の6・7期を中心としたものであると見てよさそうである。

第50図は高杯で1～8は壺部で緩やかにカーブし口縁部で直線的に伸びるもの、口縁部で緩やかに外反するもの、稜を持ちものがある。外外面とも基本的にはヘラミガキを施し、5のように外面に横ハケを施すものもある。7～18は脚部で筒部から壺部にかけて屈曲するもので外面はヘラミガキ、内面はケズリが施されている。



写真48 石列検出状況（南から）



写真49 慶長度本殿階段跡礎石検出状況（西から）



写真50 康長度本殿階段跡基壇石列検出状況（北から）

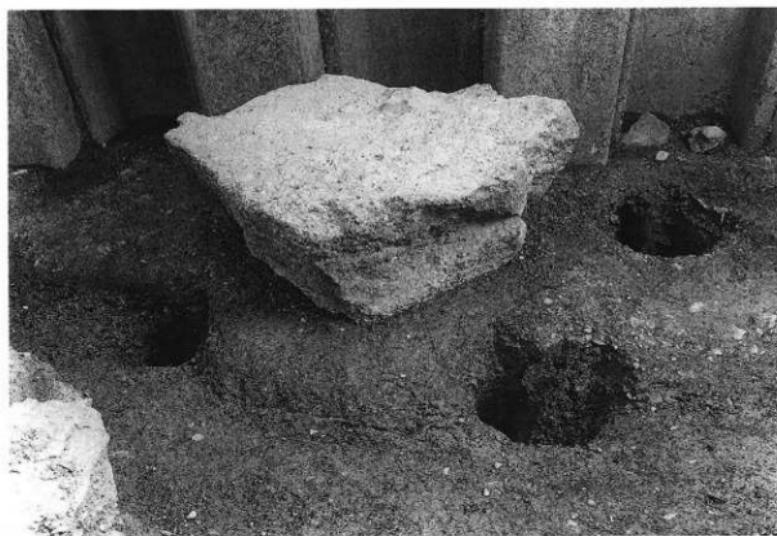
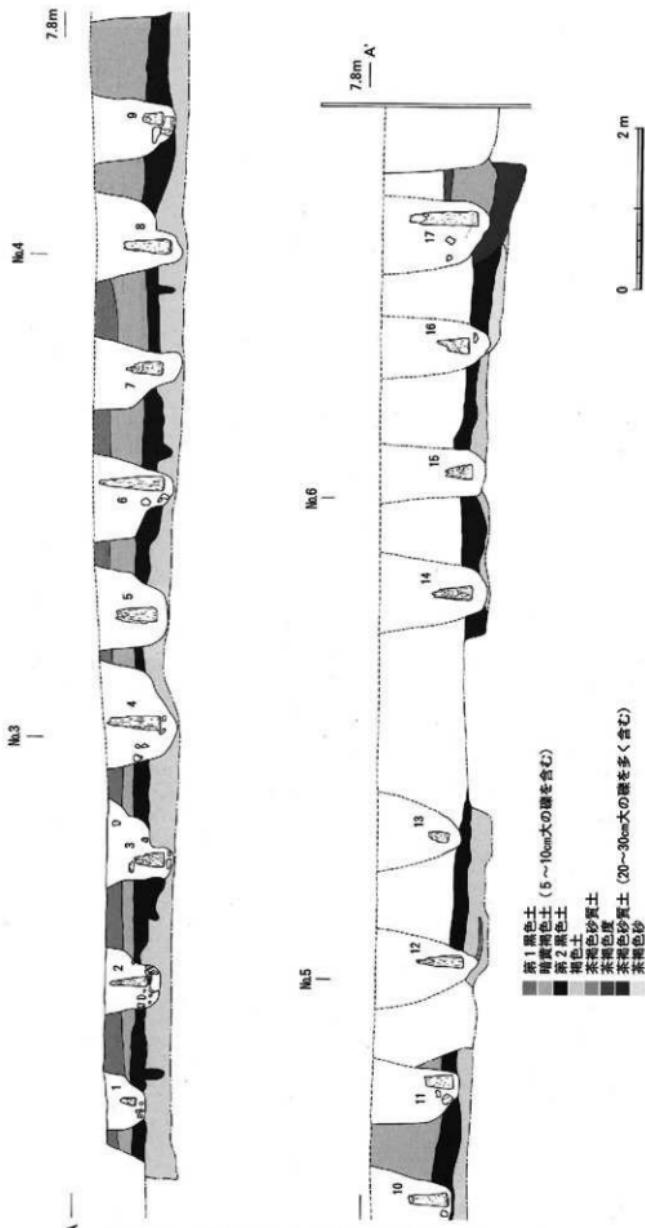


写真51 中世本殿遺構磁盤検出状況（東から）



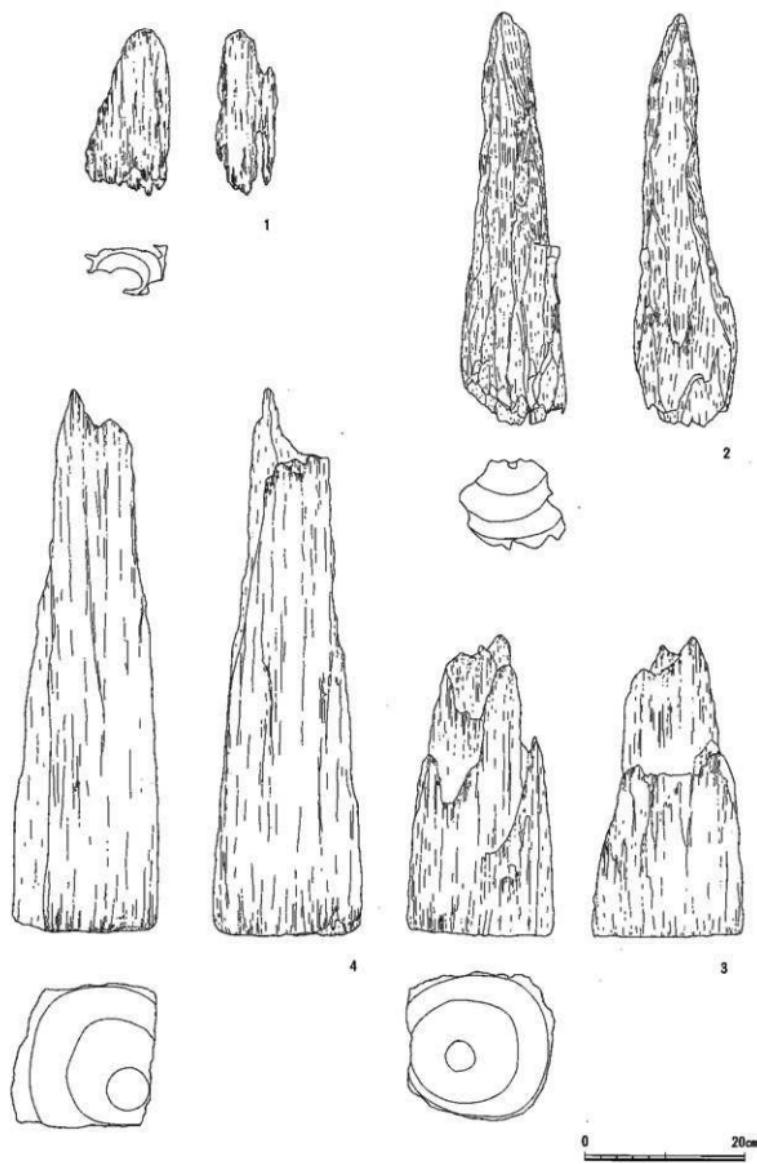
第40図 平成11年度調査区 中世据立柱櫛列断面図 (S=1/60)



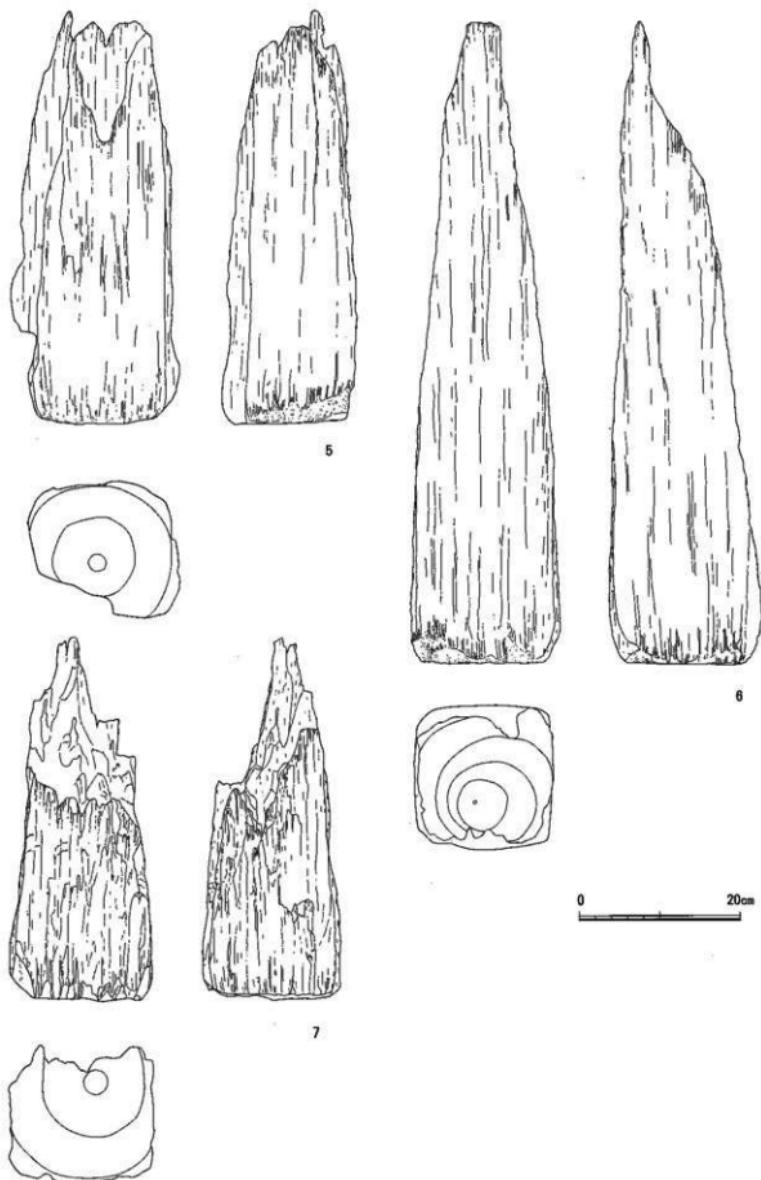
写真52 中世据立柱柵列柱根（1）（中央から東へ）



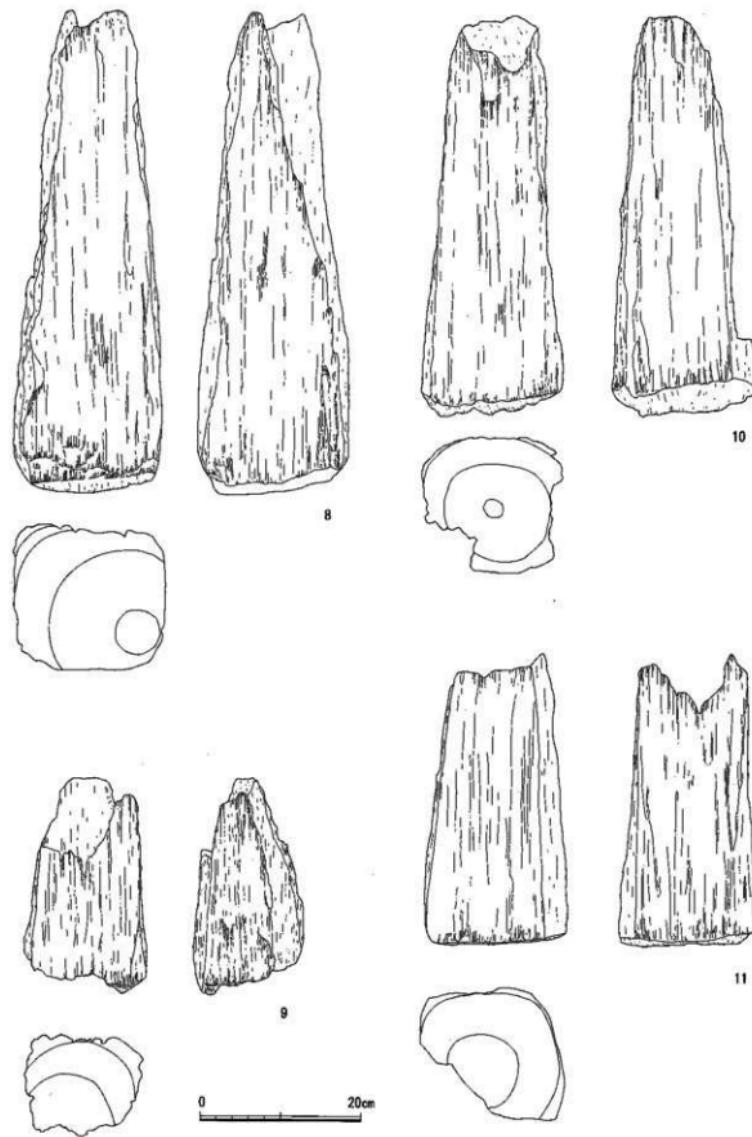
写真53 中世据立柱柵列柱根（2）（西から）



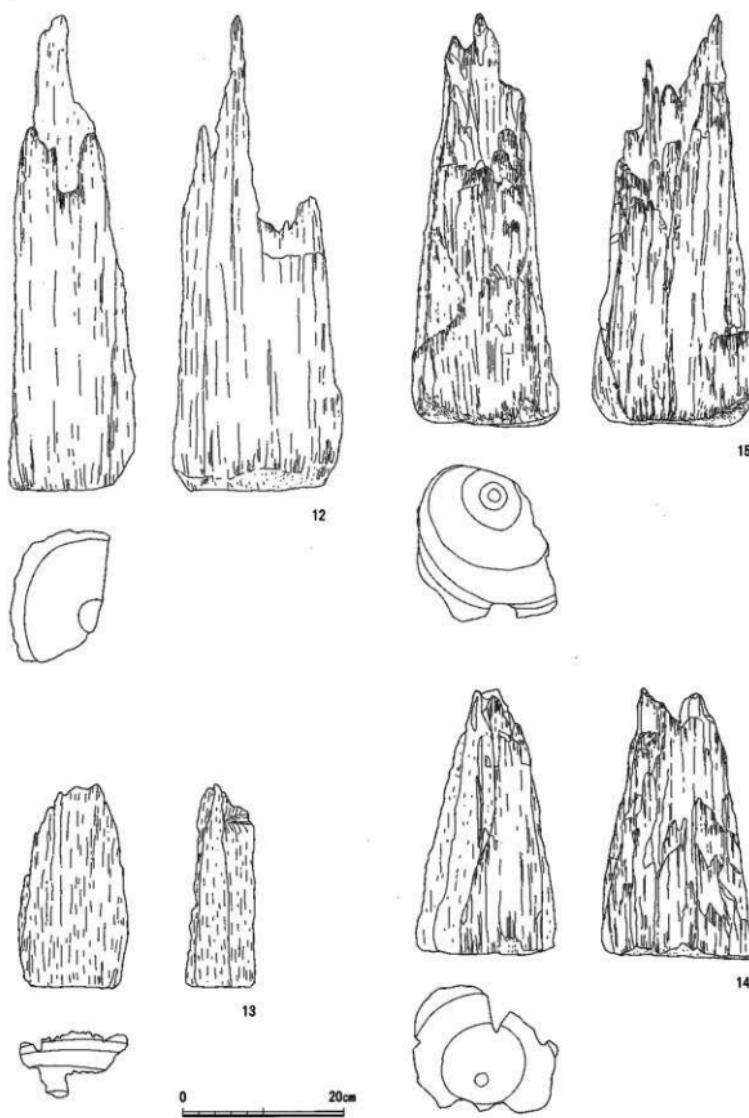
第41図 平成11年度調査区 中世掘立柱櫛列柱根実測図(1) (番号は第40図に対応 S=1/6)



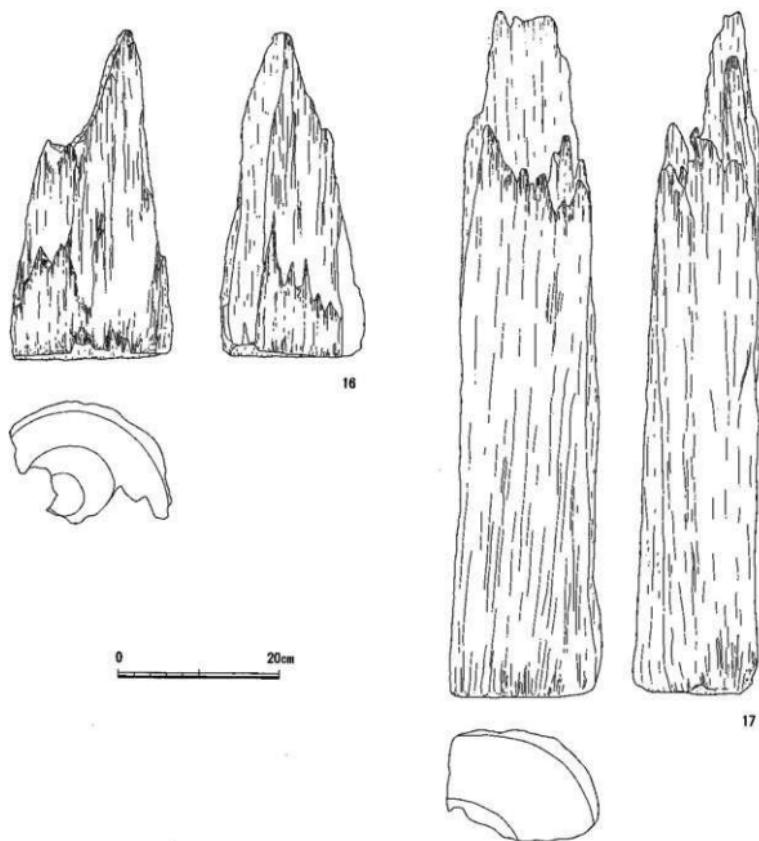
第42図 平成11年度調査区 中世掘立柱排列柱根実測図(2) (番号は第40図に対応 S=1/6)



第43図 平成11年度調査区 中世掘立柱構造実測図(3)(番号は第40図に対応 S=1/6)



第44図 平成11年度調査区 中世据立柱槽柱根実測図(4) (番号は第40図に対応 S=1/6)



第45図 平成11年度調査区 中世掘立柱櫛列柱根実測図(5)(番号は第40図に対応 S=1/6)

これらの高坏も草田編年6期に相当する。

第51図は1～7が鼓形器台、8～23が低脚坏、24が瓶型土器である。いずれも草田編年6・7期に相当する。鼓形器台は受部・台部とも稜を持つものである。受部内面はナデがあるが、3のようにミガキを加えるものもある。台部内面はケズリが施されている。これらも概ね草田編年6・7期に相当する。低脚坏は当遺跡では比較的底部のみ残存している割合が高く、坏部の出土量は少ない。8は内外面とも縦方向のハケを、15は内外面とも縦方向のミガキが施されている。瓶型土器は1固体が四散した状態で出土した。上部と下部から復元したが、両者は厳密には接合しない。上部径14cm、底径37cm、高さ45cmを測る。内面は上部が横方向のケズリ、下部は横ハケが施されていた。

第52図は玉類である。調査面積が極めて狭い範囲から極めて重要な遺物が高い密度で出土した。瑪瑙製勾玉1点(1)と蛇紋岩製勾玉1点

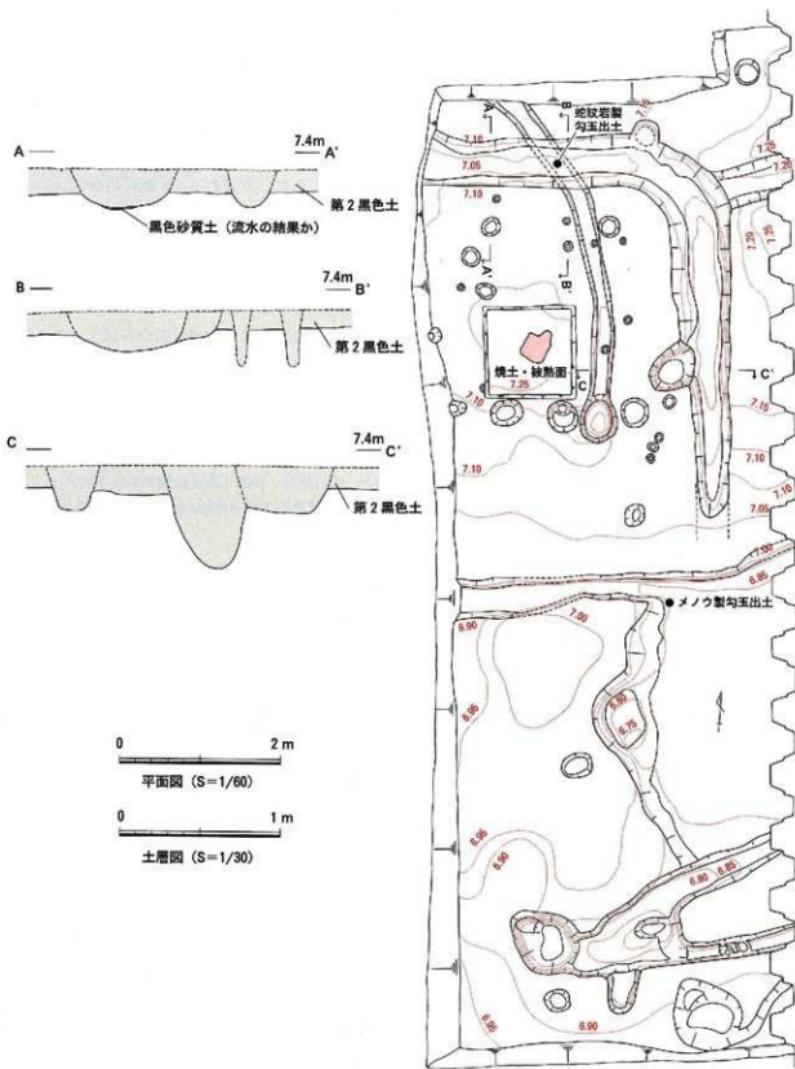
(2)、滑石製臼玉12点(3～14)、手捏ね土器片1点(15)である。瑪瑙製勾玉は良好な状態で出土している。孔内部は、片面穿孔の様相を呈するが、片面穿孔の特徴である孔貫通時に片面に生じる欠損痕ならびにその痕跡を消す調整痕などがみられないことから穿孔技法は両面穿孔である。両面から穿孔した後に一方から補修されたものとみられる。¹³⁾ 蛇紋岩製勾玉は端部が欠損している。腹部は扁平なつくりをしている。臼玉は大きさ・形状・重量にばらつきがあるものの欠損しているものは無く、良好な状態で出土している。内訳は表7・8のとおりである。手捏ね土器はこの調査区からは1点のみ破片で出土している。内面はナデ、一部指頭圧痕がある。外面には強いナデ痕がある。全体にやや粗雑な成形がほどこされている。

註

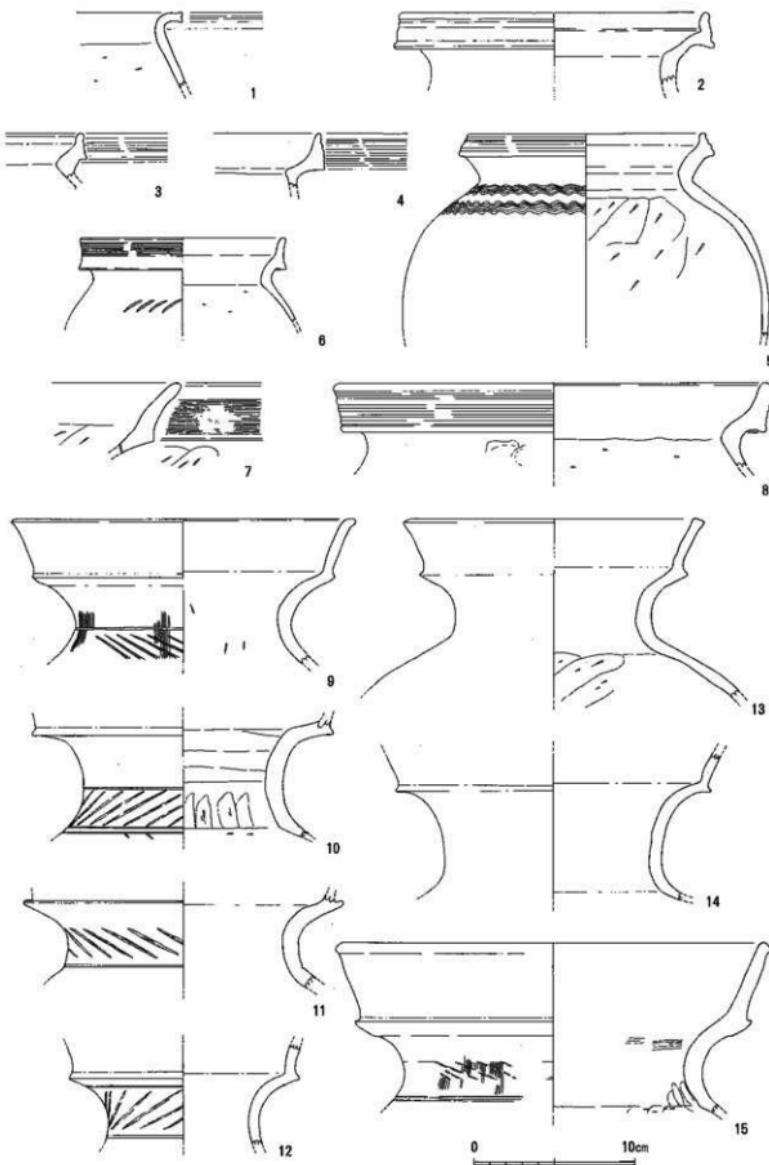
- (1) 河村好光 1992「攻玉技術の革新と山雲玉づくり」『島根考古学会誌』第9集 島根考古学会



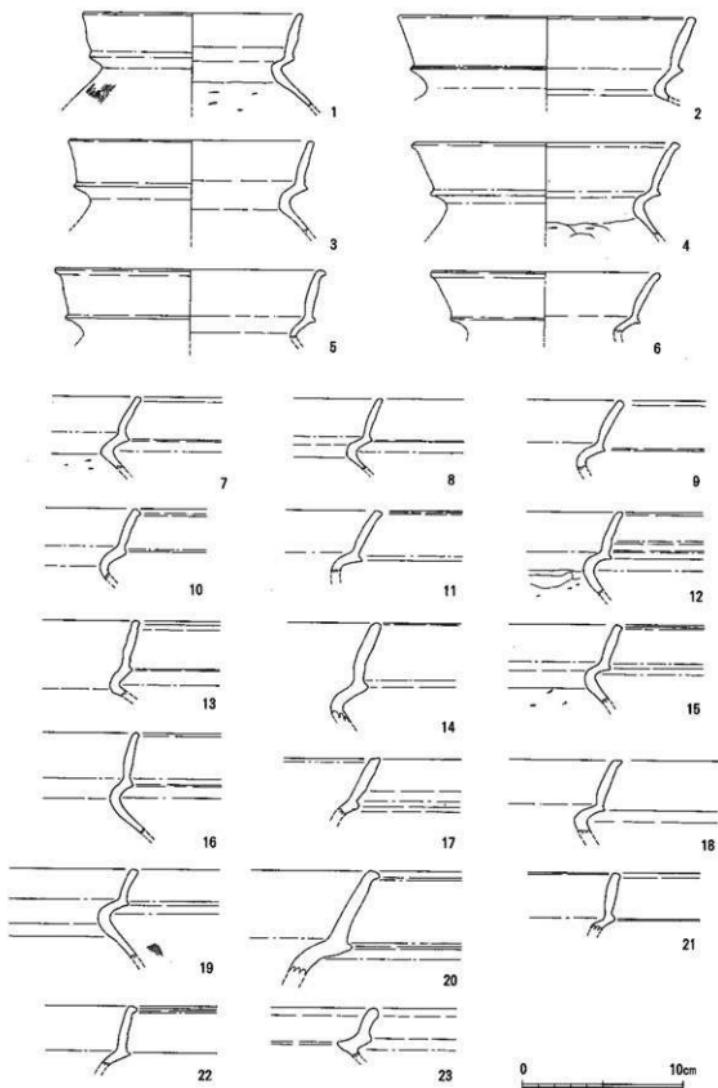
写真54 古墳時代前期造構面検出状況（北西から）



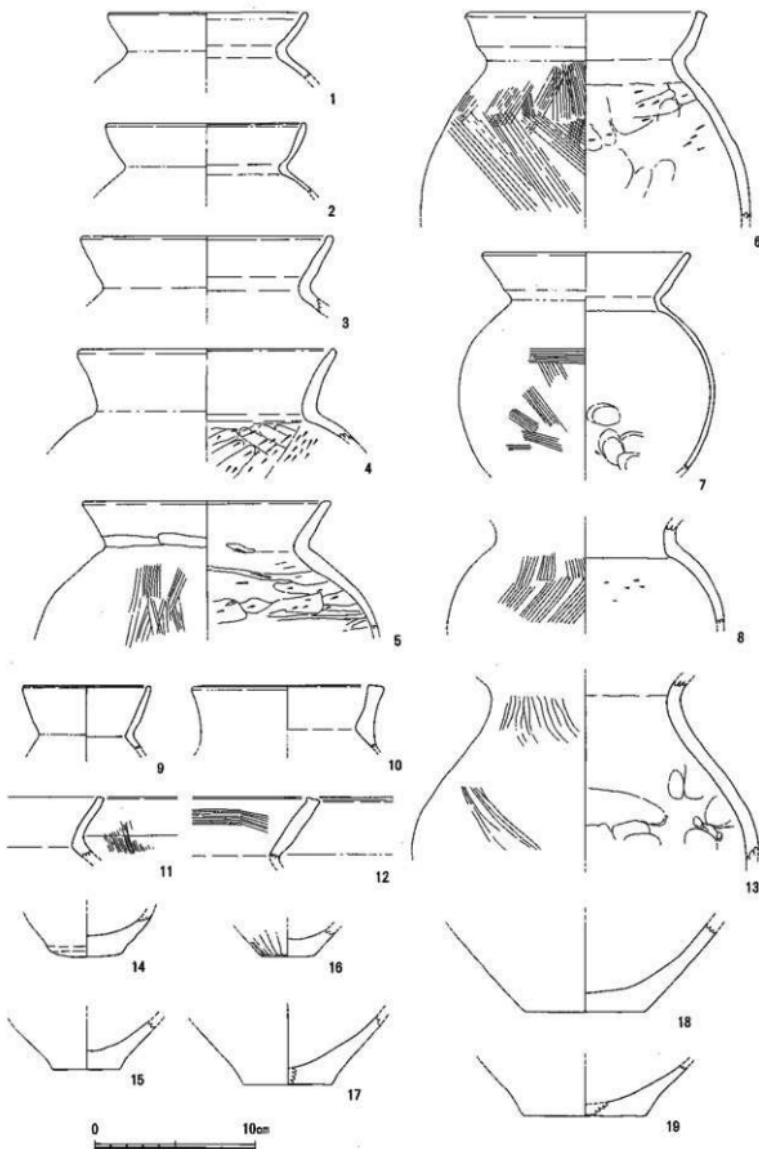
第46図 平成11年度調査区 古墳時代前期造構平面図 (S=1/60)・土層図 (S=1/30)



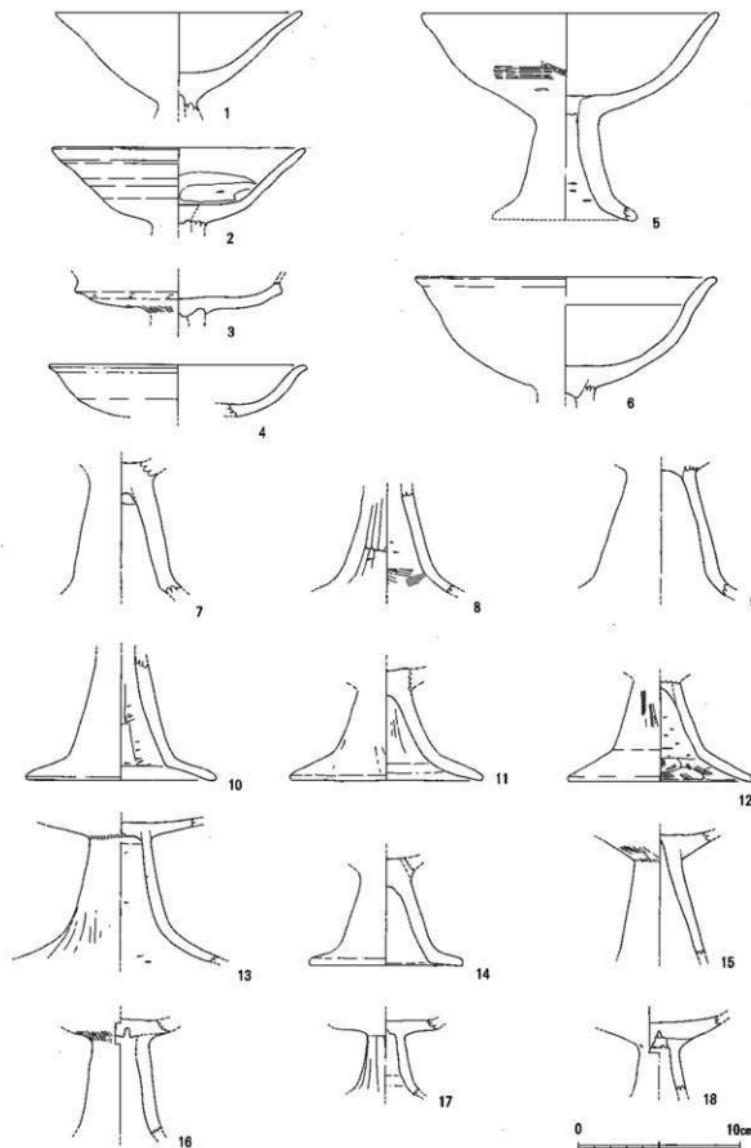
第47図 平成11年度調査区 古墳時代前期遺構出土遺物実測図(1) (S=1/3)



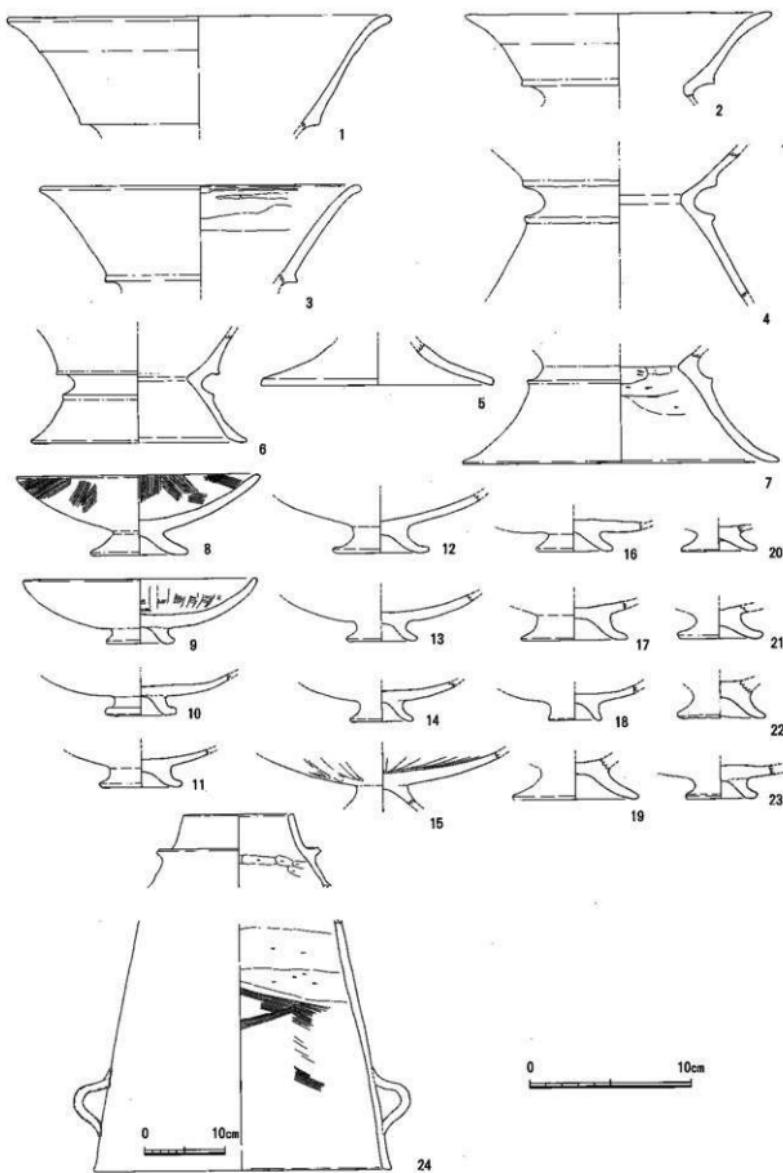
第48図 平成11年度調査区 古墳時代前期遺構出土遺物実測図（2）（S=1/3）



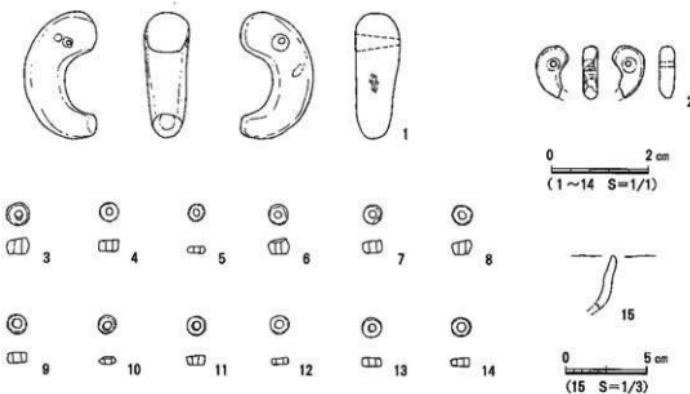
第49図 平成11年度調査区 古墳時代前期遺構出土遺物実測図(3) (S=1/3)



第50図 平成11年度調査区 古墳時代前期遣構出土遺物実測図 (4) (S=1/3)



第51図 平成11年度調査区 古墳時代前記遺構出土遺物実測図(5) (11~23はS=1/3 24はS=1/6)



第52図 平成11年度調査区 古墳時代前期造構出土遺物実測図(6)(1~14は実大、15は1/3)

表7 平成11年度調査区 出土遺物(勾玉)観察表(番号は第52図に対応)

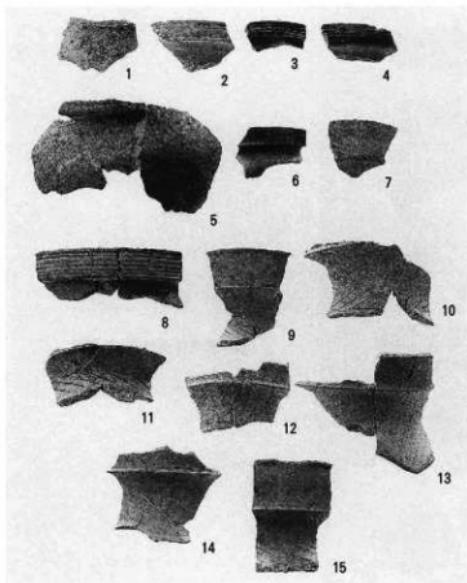
(単位 cm)

図版No.	出土層位	頭部厚	胴部幅	最大孔径	最大高	重量(g)	材質	残存率	備考
1	黒色土	1.00	0.85	0.35	2.60	4.00	瑪瑙	100	両面穿孔(孔内部補修あり)
2	黒色土	0.30	0.48	0.10	1.10	0.29	蛇紋岩	90	扁平なつくり 腹部抉りの調整は研磨によるもの(D型)

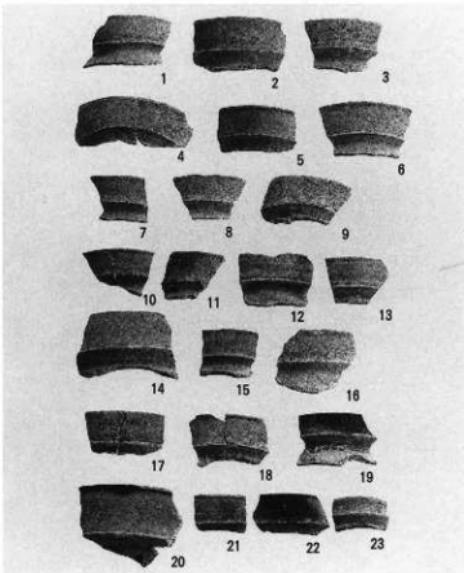
表8 平成11年度調査区 出土遺物(臼玉)観察表(番号は第52図に対応)

(単位 cm)

図版No.	出土層位	最大径	面径	最大厚	孔径	重量(g)	材質	残存率	形状
3	黒色土	0.45	0.35	0.35	0.15	0.10	滑石	100	側面にわざかなふくらみをもつ
4	黒色土	0.40	0.40	0.22	0.15	0.05	滑石	100	側面に稜をもたない
5	黒色土	0.35	0.30	0.12	0.15	0.02	滑石	100	側面に稜をもち断面形状はソロバン玉状
6	黒色土	0.42	0.30	0.30	0.15	0.07	滑石	100	側面にふくらみをもつ
7	黒色土	0.30	0.35	0.25	0.15	0.05	滑石	100	側面にわざかなふくらみをもつ
8	黒色土	0.42	0.35	0.30	0.15	0.06	滑石	100	側面に稜をもち断面形状はソロバン玉状
9	黒色土	0.40	0.35	0.20	0.15	0.04	滑石	100	側面にふくらみをもつ
10	黒色土	0.35	0.35	0.15	0.15	0.02	滑石	100	側面にふくらみをもつ
11	黒色土	0.40	0.40	0.20	0.15	0.04	滑石	100	側面に稜をもたない
12	黒色土	0.38	0.38	0.15	0.15	0.08	滑石	100	薄く扁平
13	黒色土	0.40	0.40	0.18	0.15	0.05	滑石	100	側面に稜をもたない
14	黒色土	0.40	0.38	0.18	0.15	0.03	滑石	100	側面に稜をもたない

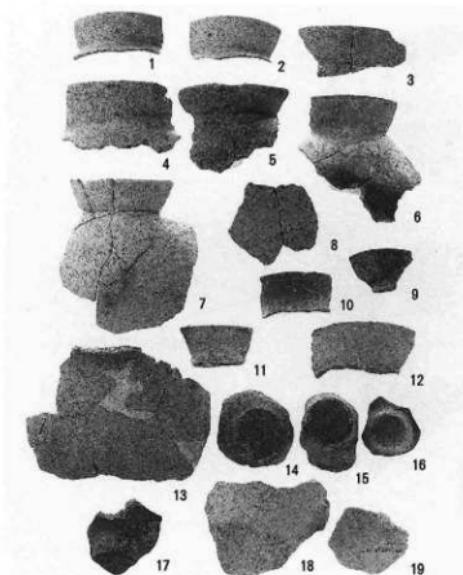


(左：番号は第47図に対応)

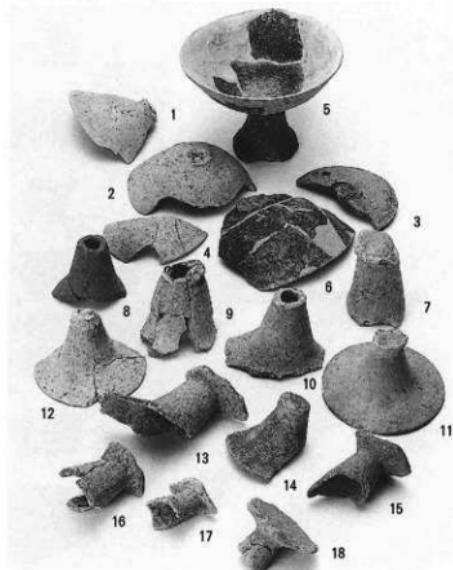


(右：番号は第48図に対応)

写真55 平成11年度調査区 古墳時代前期遺構出土遺物（1）



(左：番号は第49図に対応)



(右：番号は第50図に対応)

写真56 平成11年度調査区 古墳時代前期遺構出土遺物（2）

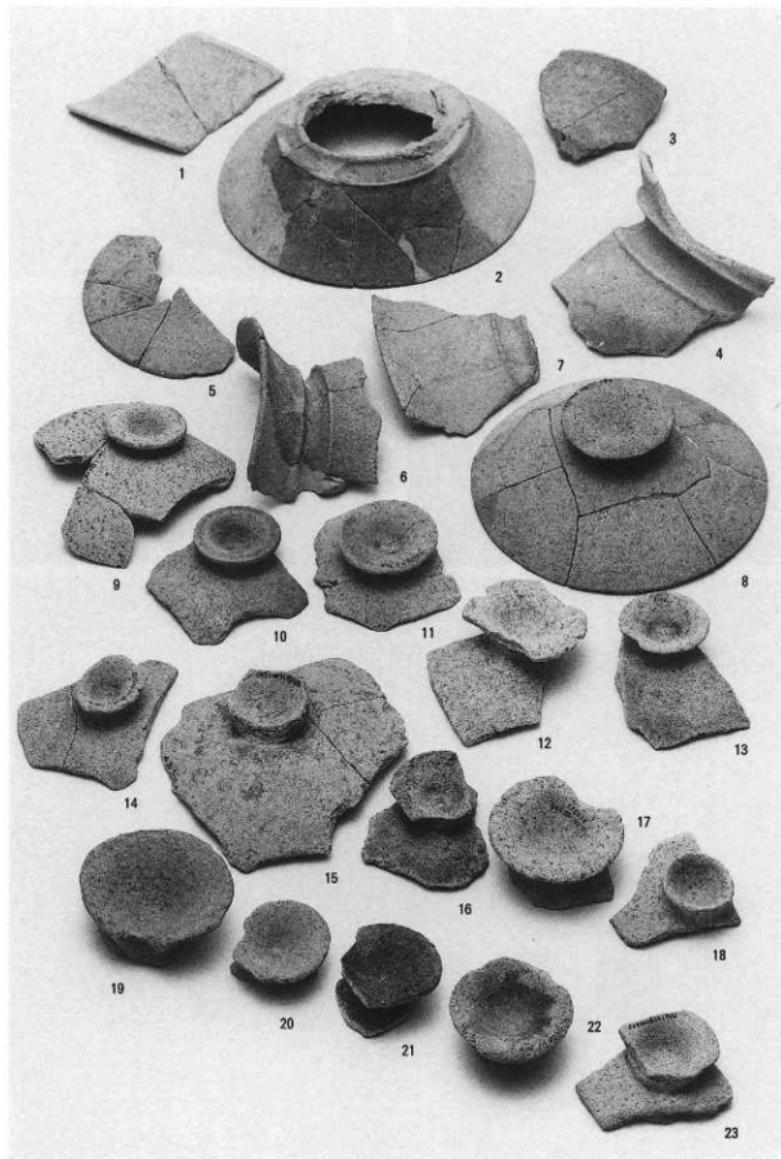


写真57 平成11年度調査区 古墳時代前期遺構出土遺物（3）（番号は第51図に対応）

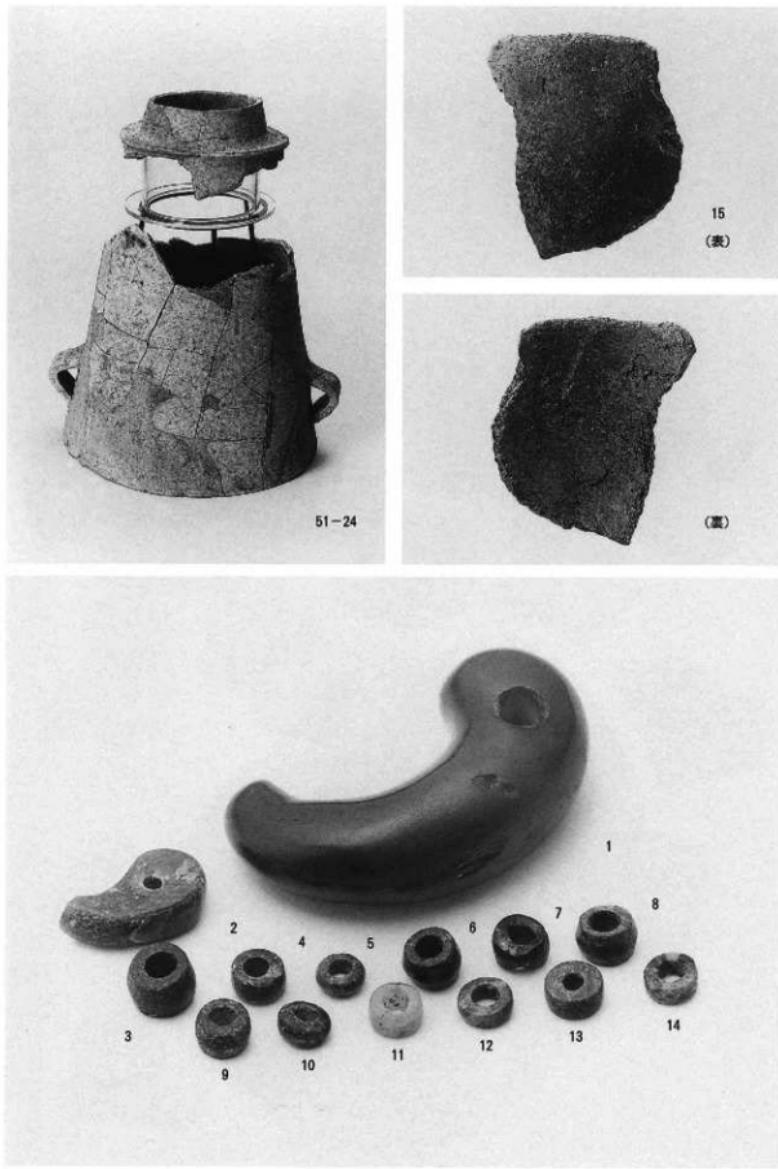


写真58 平成11年度調査区 古墳時代前期造構出土遺物（4）（番号は第52図に対応）

第5章

八足門前の調査①

(近世以降の遺構)

第5章 八足門前の調査①（近世以降の遺構）

第1節 八足門前の土層について

前年までの発掘調査の成果については、第4章で述べた。本章は、平成12年度7月以降の調査成果である。

八足門前出土の基本土層については、第53図で示した。また、巨大本殿遺構に関連する遺構・遺物については、第6章で述べる。本章第1節では、巨大本殿遺構より上層の出土遺物について述べる。

表土層

表土層は、八足門前に敷設されている石置・及び石段の一部を撤去した段階からの遺物である。寛文造成土が検出される20cmほどの水平堆積した土層である。

出土遺物（第54図1～3・写真60・表9・12）

1は、土師質土器の皿である。底径7.5cmと大型の皿である。

2・3は、土師質土器の柱状高台付坏である。2は、磨耗により不明であるが、3には明確な回転糸切りが残されている。

寛文造成土

層中からの出土遺物から17世紀前半代の陶磁器が出土していること。また赤褐色の單一の造成土であることから、寛文度（1667年遷宮）の造成土であると考えられる。

また、寛文造成土中から瓦が出土していることから、寛文度以前の境内に瓦葺の建物があったことを示唆している。寛文造営時は、それまでの仏教的色彩をもつ全ての建物が排除され、社等景観が一新されたとされており、瓦の出土がそのことを裏付けている。

出土遺物（第54図4～18・写真61～63・表9～12）

4は弥生土器の底部で、底部にヘラ削りがみられる。

5は、土師質土器の皿である。

6～8は、土師質土器の柱状高台付坏である。

6は、坏部内部底部に強いナデがみられる。

9は、見込みに胎土目積痕のある肥前系陶器の皿である。17世紀後半のもの。

10は、見込みに砂目積み痕のある肥前系陶器の皿である。17世紀代か。

11は、伊万里の磁器皿である。17世紀代であろう。

12は、肥前系磁器の大皿である。見込み部に目積み痕がみられる。

13は、鉄釘である。長さ5.1cmでほぼ完形である。釘頭部がドーム状に膨らんでおり、紙として用いられたものであろうか。

14～18は、瓦である。調整などについては遺物観察表（表11）を参照いただきたい。14～16は、丸瓦。17・18は平瓦である。軒瓦は出土していない。

上層レキ層

巨大本殿遺構の上層の堆積土である。建物廃絶直後に堆積した土が26cmから30cmの厚みをもって水平堆積していることが確認された。

出土遺物（第55図・写真64～65・表12～13）

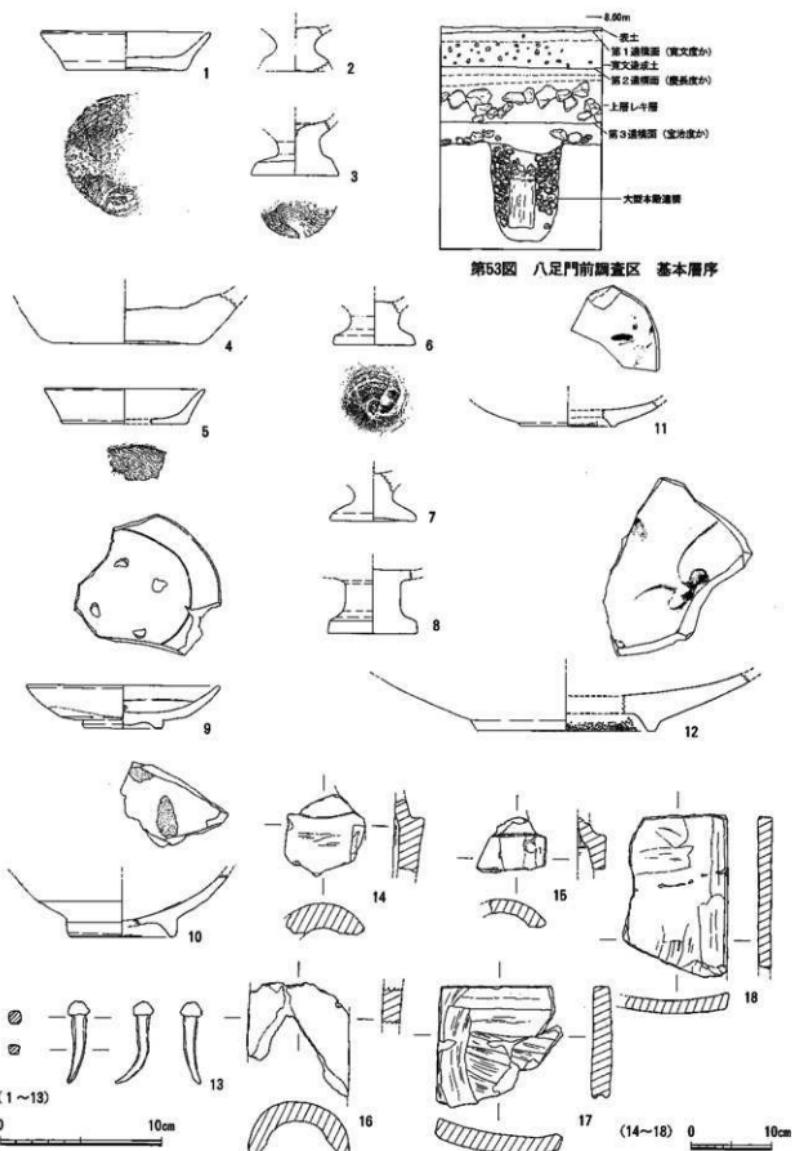
1は、弥生土器甕の口縁部である。時期は、松本編年V-1であろう。

2は、須恵器甕の口縁部である。口縁端部が外反しており、外面に横一状の沈線を巡らす。

3～17は、土師質土器である。3は、手捏ね成形の皿である。京都系の土師質土器であろう。

4～6は、坏である。7～12は、皿である。いずれも回転糸切り痕の明確に残るものである。

13は、貼り付け高台の坏である。14～17は、柱状高台付坏である。いずれも摩滅しており、不明な部分があるが、脚部の長さは14が2cm、15・16が3cm、17が4cmとなっている。



第54図 八足門前調査区 出土遺物実測図(1) (S=1/3)

表9 八足門前調査区 出土遺物(土器)観察表①(番号は第54図と対応)

番号	層位	種類	器種	径(cm)	深さ(cm)	底深さ(cm)	残存率	色調	胎土	調査/形態/文様	備考	
1	表土	土師質上器	皿	10.3	2.4	7	全体の50	にぼい模様	赤	底部:回転条切り	微細な模様、内面にスヌ付器	
2	表土	土師質下器	柱状高台付环	—	—	—	全体の50	淡褐色	やや粗	底部:純然とせず、表面に穿孔	磨耗が著しい	
3	表土	土師質上器	柱状高台付环	—	—	5	全体の50	淡褐色	赤	底部:回転条切り 腹部:回転条切り 外面部:回転ナブ	—	
4	寛文造成土	赤生土器	甕	—	—	9.3	底盤のみ	灰白色、外腹 底盤:暗褐色	中や粗 内面:1mm 外面部:底盤は堅硬とせず 外面部:輪郭のラグエリ	底盤:一定方向のヘラケズり 内面:回転ナブ	弥生中~後期	
5	寛文造成土	土師質土器	皿	10	2.2	7	全体の30	にぼい模様	赤	底部:回転条切り 内面:内面:回転ナブ	—	—
6	寛文造成土	土師質土器	柱状高台付环	—	—	5	全体の30	にぼい模様	やや粗	底盤:回転条切り	磨耗が著しい	
7	寛文造成土	土師質土器	柱状高台付环	—	—	5	全体の50	にぼい模様	赤	底盤:一定方向のヘラケズりで回転をつくる	—	
8	寛文造成土	土師質土器	柱状高台付环	—	—	5.4	全体の80	淡褐色	赤	底盤:回転条切り	磨耗が著しい	
9	寛文造成土	陶器	皿	12	2.6	4.8	全体の30	粘土:黄褐色 釉面:暗褐色	中や粗 内面:1mm 外面部:上半部無釉、下半部二周のケヌリで輪郭	底盤:割りだし 内面:4周の直日模み底 外面部:上半部無釉、下半部二周のケヌリで輪郭	17世紀後半肥前系	
10	寛文造成土	陶器	皿	—	—	6.6	小片	胎土:灰白色 釉面:灰白色	赤	成型窯全面施釉 臺付:割りだし 臺面:白日模み底 内面:珠跡等々所に沙目模み底	17世紀肥前系施釉	
11	寛文造成土	陶器	皿	—	—	9.8	小片	胎土:白色 釉面:灰白色	赤	成型窯全面施釉 臺付:割りだし 臺面:白日模み底 内面:沙目模み底と輪郭を削平	17世紀の伊万里	
12	寛文造成土	陶器	大皿	—	—	11	小片	胎土:灰白色 釉面:暗褐色	赤	成型窯全面施釉 臺付:割りだし 臺面:沙目模み底 内面:沙目模み底と輪郭を削平	肥前系	

表10 八足門前調査区 出土遺物(鉄製品)観察表(番号は第54図と対応)

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
13	寛文造成土	釘	—	5.1	—	0.8×0.8(方形)	15.34	100 打面:円形・頭部:中央がドーム状に膨らむ新形

表11 八足門前調査区 出土遺物(瓦)観察表(番号は第54図と対応)

番号	層位	種類	瓦種	高さ(cm)	底径(cm)	残存率(%)	残存率(%)	色調	胎土	調査/形態/文様	備考
14	寛文造成土	瓦	丸瓦	10	9.5	全体の30	灰色	赤、1ミリ程度の砂粒を多く含む	(凸面) 横位のハケ日(凹面) 在日底は割 然とせず	—	—
15	寛文造成土	瓦	丸瓦	6	9	小片	灰色	やや粗	(凸面) 着位のハケ日、推復丘底、ヘラケズリ、横ナブ(凹面) 横状工具による比麻、布目模み底とせず	—	—
16	寛文造成土	瓦	丸瓦	10.5	13	全体の30	灰色	赤、1ミリ程度の砂粒を多く含む	(凸面) 着位のハケ日、横位の横底(凹面) 在日、ヘラケズリによる面取り	—	—
17	寛文造成土	瓦	平瓦	13.5	14	全体の30	灰褐色	やや粗、3ミリ大の砂粒を少し含む	(凹面) 横位のハケ日、横位のハケ日(凸面) (凸面) 着位のハケ日、横位のハケ日(凸面) (凹面) 着位のハケ日	—	—
18	寛文造成土	瓦	平瓦	18.5	12.5	全体の30	灰色	赤、1ミリ大の砂粒を少し含む	(凸面) 着位のハケ日、横位のハケ日(凸面) (凹面) 着位のハケ日	—	—

表12 八足門前調査区 出土遺物 陶磁器(番号は写真59と対応)

番号	層位	種類	器種	時期	特徴	四版	番号	層位	種類	器種	時期	特徴	四版
1	表土	肥前系陶器	皿				14	寛文造成土	肥前系陶器	皿	17		
2	表土	肥前系織器	皿		17		15	寛文造成土	肥前系織器	皿	17		
3	寛文糞縫織器	肥前系陶器	皿	17			16	寛文造成土	肥前系織器	皿	17		第54図-11
4	寛文造成土	青磁	皿	15~16			17	寛文造成土	肥前系織器	皿	17		
5	寛文造成土	青磁	碗	16	縦縫隙舟		18	寛文造成土	肥前系織器	縦利版			
6	寛文造成土	白磁	皿	15~16			19	寛文造成土	肥前系織器	大皿		第54図-12	
7	寛文造成土	青磁	大皿	16~17	津川窯系		20	寛文造成土	肥前系織器	皿	17		第54図-9
8	寛文造成土	青花	皿	—	玉頭		21	寛文造成土	肥前系陶器	大皿	17		
9	寛文造成土	肥前系織器	皿				22	寛文造成土	肥前系陶器	皿			
10	寛文造成土	肥前系織器	皿				23	寛文造成土	肥前系織器	皿	17		
11	寛文造成土	肥前系織器	皿		17		24	寛文造成土	肥前系織器	皿	17		
12	寛文造成土	肥前系織器	皿				25	寛文造成土	肥前系陶器	皿	17		第54図-10
13	寛文造成土	肥前系織器	皿				26	上葉レキ	白磁	碗	12か	V類	

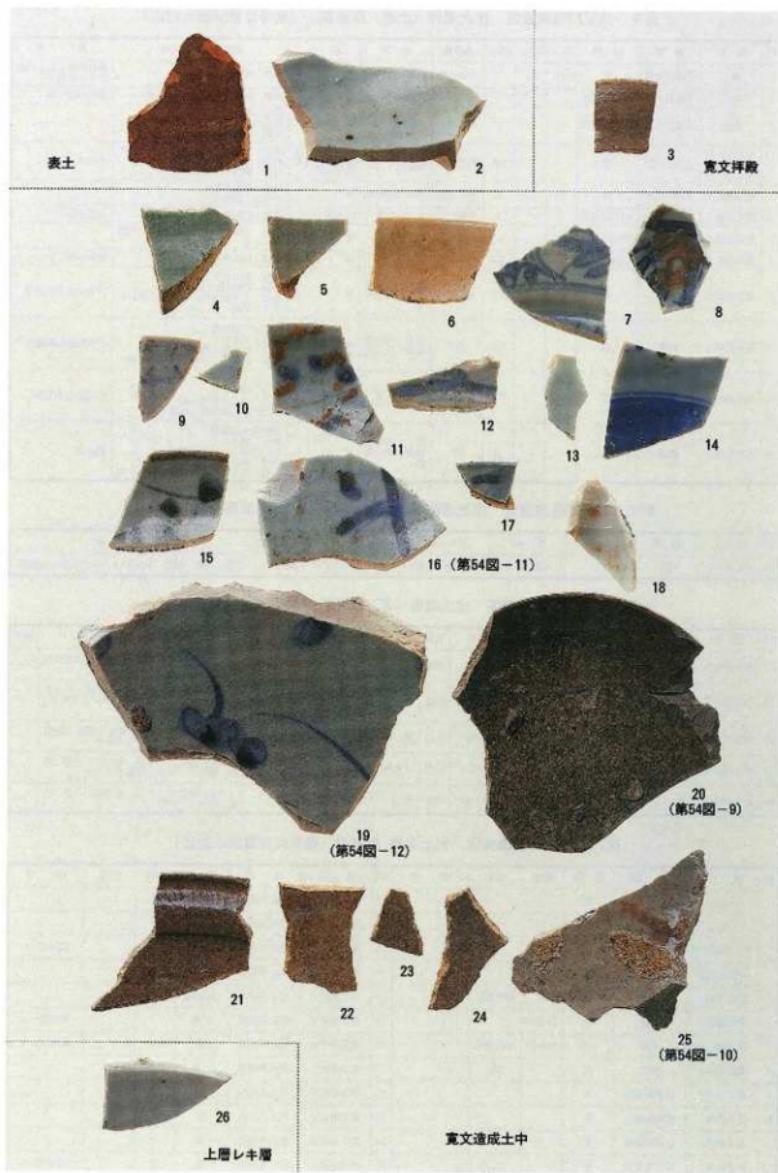
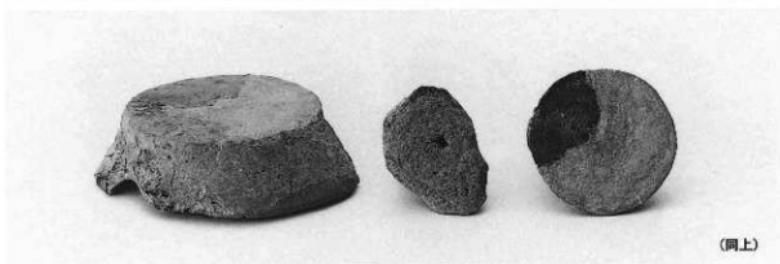
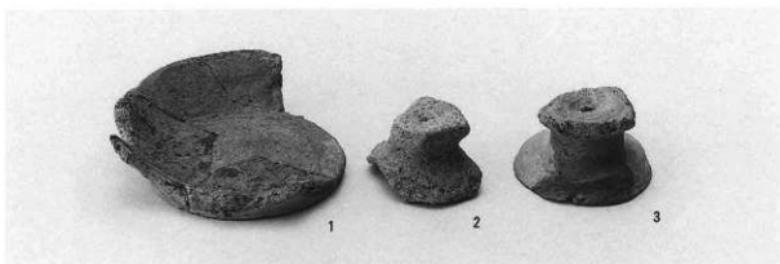
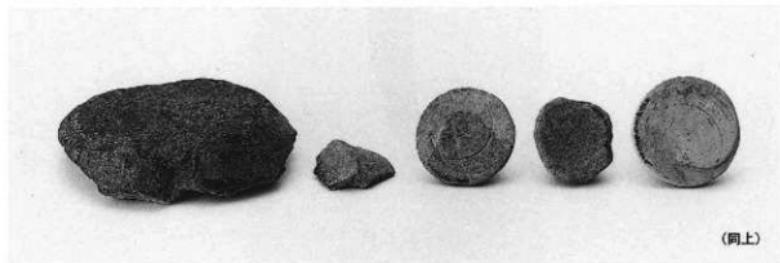
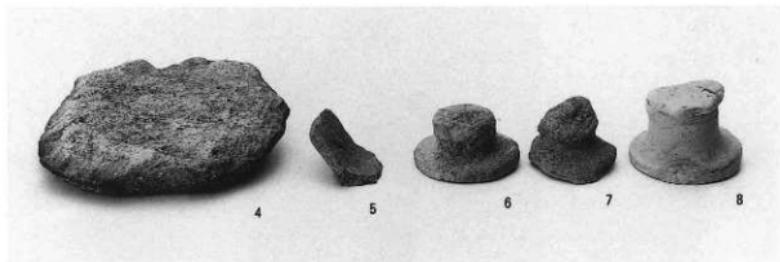


写真59 八足門前調査区 陶磁器（番号は表12と対応）



(同上)

写真60 八足門前調査区 表土（番号は第54図と対応）



(同上)

写真61 八足門前調査区 寅文造成土 土器（番号は第54図と対応）

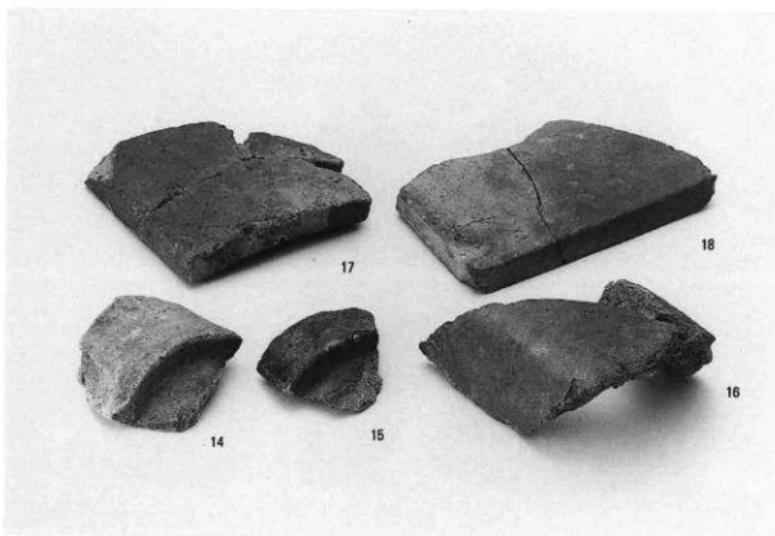
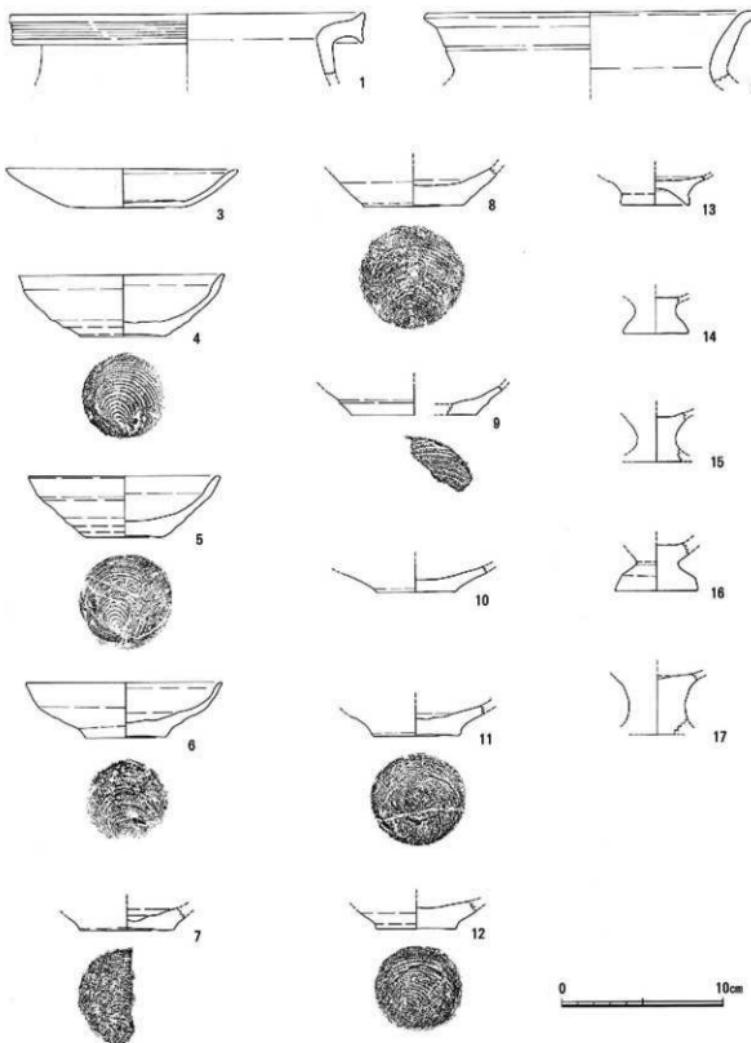


写真62 八足門前調査区 寛文造成土 瓦（番号は第54図と対応）



写真63 八足門前調査区 寛文造成土 鉄製品（番号は第54図と対応）



第55図 八足門前調査区 出土遺物実測図(2) (S=1/3)

表13 八足門前調査区 出土遺物（土器）観察表②（番号は第55図と対応）

番号	層位	種類	口径(cm)	底高(cm)	底径(cm)	成形率(%)	色調	粘土	調整／形態／文様	備考	
1	上層レキ	陶片上層	焼	—	—	—	にぼい褐色	密	二重口縁：三条の凹線文 内外面：滑ナマ	—	
2	上層レキ	須恵器	焼	—	—	—	口縁部小片	青灰褐色	密	口縁部：外に折れる 口縁部外側：横ナギ、横？ 内側：横ナギ、一定方向ナマ	—
3	上層レキ	土師質土器	藍	14	2.4	7	全体の80	淡褐色	密	底部：輪オモニ、ナマ 外縁：上平輪ナマ 下：滑オモニ 内縁：輪ナマ、一定方向ナマ	—
4	上層レキ	土師質土器	藍	12.8	3.9	5	全体の80	にぼい褐色	密	底部：円転み切り 内縁：輪にによる回転ナマ 外縁：丸み	—
5	上層レキ	土師質土器	藍	12	3.8	5	全体の80	淡黄褐色	密	底部：円転み切り 内縁：工具による回転ナマ	—
6	上層レキ	土師質土器	陶	12.2	3.6	5	全体の80	褐色	やや粗	底部：円転み切り 内縁：工具による回転ナマ	擦耗が著しい
7	上層レキ	土師質土器	藍	—	—	5.8	底部のみ	淡褐色	密	底部：円転み切り	擦耗が著しい
8	上層レキ	土師質土器	藍	—	—	6.2	底部のみ	淡褐色	密	底部：円転み切り	擦耗が著しい
9	上層レキ	土師質土器	藍	—	—	—	全体の30	にぼい褐色	密	底部：円転み切り 内外面：回転ナマ	—
10	上層レキ	土師質土器	藍	—	—	4.8	全体の30	にぼい褐色	密、1mm程度の 砂粒を少し含む	—	擦耗が著しい
11	上層レキ	土師質土器	藍	—	—	5.4	底部のみ	にぼい褐色	やや粗	底部：円転み切り 内外面：回転ナマ	—
12	上層レキ	土師質土器	藍	—	—	5	底部のみ	淡褐色	やや粗	底部：円転み切り 内外面：回転ナマ	—
13	上層レキ	土師質土器	紙糊环	—	—	4.2	底部のみ	にぼい褐色	密	底部：捺り付け高台、回転 内外面：回転ナマ	—
14	上層レキ	土師質土器	柱状高台付环	—	—	—	全体の60	淡褐色	やや粗	—	擦耗が著しい
15	上層レキ	土師質土器	柱状高台付环	—	—	—	全体の60	淡黄褐色	やや粗	—	擦耗が著しい
16	上層レキ	土師質土器	柱状高台付环	—	—	5	全体の80	褐色	やや粗	底部：円転み切り	擦耗が著しい
17	上層レキ	土師質土器	柱状高台付环	—	—	—	全体の50	にぼい褐色	密、1mm程度の 砂粒を少し含む	—	擦耗が著しい



3

4

5

6



(同上)

写真64 八足門前調査区 上層レキ層 土器（1）（番号は第55図と対応）

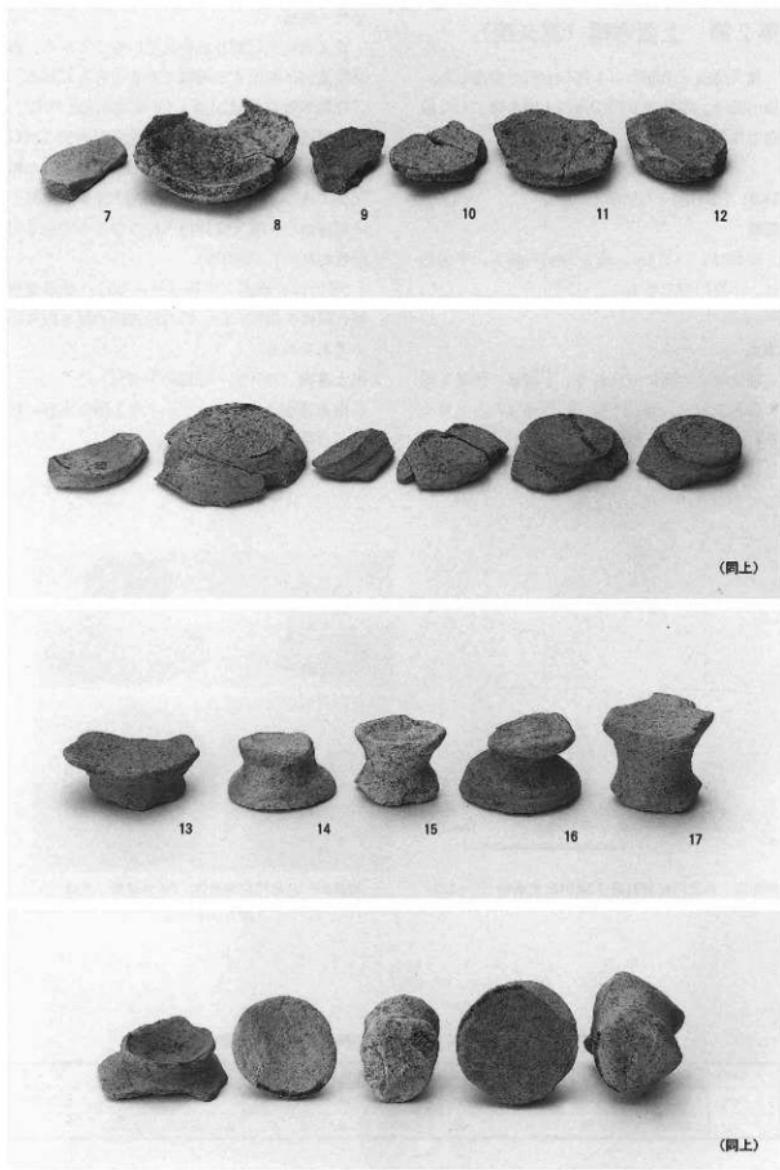


写真65 八足門前調査区 上層レキ層 土器（2）（番号は第55図と対応）

第2節 上面遺構（寛文度）

寛文造成土上面から1基の土坑を検出した。検出面は、現地表下約23cm表土層を除去した段階で検出した。

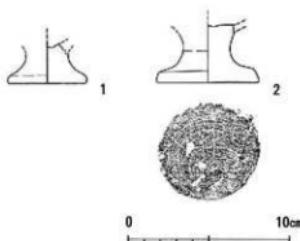
SK01（第57図・写真67～69）

規模

規模は2.2×2.2m、深さ30cmを測る。平面形は、不整円形である。

覆土

覆土は、2層に分かれる。下層は、角礫を密に含んでおり、礎石下の下部構造であると考えられる。上層は、角礫を含むものの、まばらであり、礎石抜き取り後の覆土であると考えられる。



第56図 八足門前調査区 SK01出土遺物 (S=1/3)

年代・性格

寛文造成土に掘り込まれていることから、寛文度造営に関係する遺構であると考えられる。

「杵築大社宮中絵図面」（千家家所蔵）では、寛文度造営（1667年遷宮）と延享度造営（1744年遷宮）の建物位置を一枚の碁盤図に示した絵図面である。この絵図面と現在の建物の位置との関係から、寛文度拝殿西柱のひとつである可能性が高い。（第58図）

SK01は、礎石下の掘り込み地行（延享度拝殿と同様の構造）か、礎石除去後の抜き取り跡と考えられる。

出土遺物（第56図・写真66・表14）

出土遺物は少なく、1～2の土師質土器の柱状高台付环のみである。

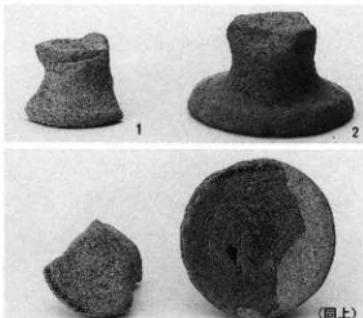
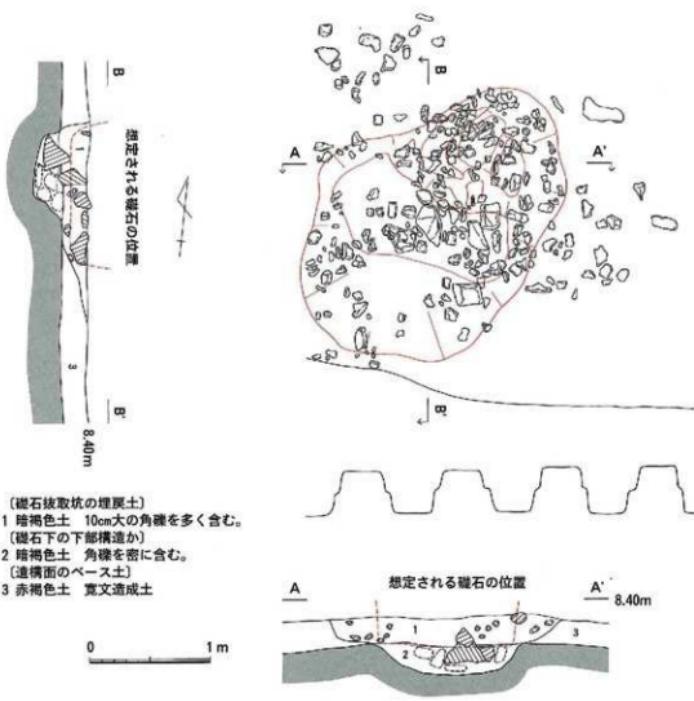


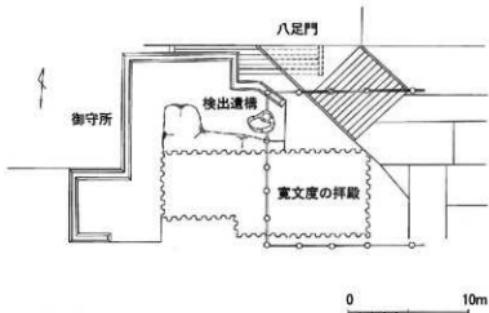
写真66 八足門前調査区 SK01遺構 土器
(番号は第56図と対応)

表14 八足門前調査区 SK01遺構出土遺物観察表（番号は第56図と対応）

遺構名	種類	器種	口径	高さ	底径(cm)	既存率(%)	色調	胎土	備考
1 SK01	土師質土器	柱状高台付环	—	—	5	全体の50	に赤い褐色	やや粗	—
2 SK01	土師質土器	柱状高台付环	—	—	6.5	全体の60	暗色	密	底部：剥離未切り 外面：剥離ナデ



第57図 八足門前調査区 SK01遺構平面図・土層図 (S=1/40)



第58図 八足門前調査区 遺構検出位置 (S=1/400)



写真67 八足門前調査区
SK01造構検出状況
(北東から)



写真68 八足門前調査区
SK01造構半截状況
(南西から)

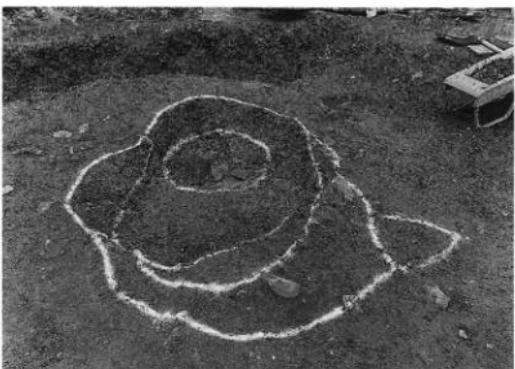


写真69 八足門前調査区
SK01造構完掘状況
(南西から)